

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会会報  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

(題字：中村信一 十全同窓会会長)

## 新年のご挨拶

十全同窓会会長 中村 信 一



新年あけましておめでとうございます。同窓会会員の皆様には、お元気で新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年は母校創立百五十五周年、同窓会発足八十五周年になります。年頭にあたり、母校金沢大学医学類ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆様のご健勝、ご活躍をお祈りいたします。

昨年は、本部ならびに各県支部の役員をはじめ会員の皆様から暖かいご支援・ご協力を賜り、深く感謝いたしております。本年も、会員相互の親睦の増進、十全同窓会報の充実、医学展をはじめと

する学生課外活動や医学図書館への支援・整備補助等、基幹的同窓会事業の着実な推進に努める所存でございます。特に、各地の支部との連携を図り、母校の発展と会員の皆様のご活躍に役立てたいと考えています。昨年は富山支部総会が二十八年振り、神奈川支部総会が十四年振りに開催される等、二十一支部の総会が開催され、参加人数は四百名余に及びました。ご尽力を賜りました支部長をはじめとする会員の皆様方に感謝申し上げますとともに、本年もより多くの地域で総会が開催され会員相互の親睦が深まることを祈念致します。

年頭にあたり、昨年及び本年の母校と同窓会に関係したことを幾つか紹介させていただきます。第一には、平成十年三月の附属病院新営工事の起工式をスタートとする宝町再開発事業が完了し、昨年七月に同窓会総会と合わせ「医学類プロムナード及び附属病院環境整備事業完成

式」が、馳文部科学大臣のご臨席のもと挙行されたことです。併せて同窓会会報「宝町キャンパス整備事業竣工特集号」を本年一月に発行致しました。本年は新装なった宝町キャンパスが初めて迎える正月です。改めて、文久二年、種痘所設立に関わった黒川良安とその門下生の心にあつたに相違ない、「人命を救わんとする強い願いと未だ不確かな治療法に対する恐れなき挑戦」、このことに想いを致し、新たな飛躍の年となりますよう祈念致します。関連して、本年夏には「遊歩道」の完成が予定されています。多くの会員の皆様が新装なった宝町キャンパスへご来訪され、母校を励まして頂きたく存じます。第二には、「千葉大学、長崎大学との共同大学院先進予防医学研究科」開設の件です。昨年四月に第一期生を迎え順調に歩み始めました。本年はヨーロッパ各国の主要大学院との予防医学に関する教育・研究の連携を深め、スーパードグローバル大学(SGU)としての金沢大学の顔とし一層の飛躍が期待されます。第三は、昨年度から始まった「第三期中期目標・中期計画」の件です。金沢大学は「重点支援③、世界卓越型」を選択しました。医学類・医学系におきましては中核として金沢大学の「世界で卓越した教育研究」を牽引されることを強く願っています。

広く世界に目を転じますと、人工知能(AI)への関心が高まっています。医学・医療の分野でも、遺伝子データに立脚した個別化医療などにAIが活用されつつあり、附属病院も参加しているプレシジョン・メディスン(精密医療)プロジェクト「SCRUM-Japan」が目下進行

しています。本分野における医学系・附属病院のご活躍を期待致しております。最後に、本年も会員の皆様にとつて、また、母校ならびに同窓会にとつて、よい年になりますよう祈念し、年頭のご挨拶とさせていただきます。

### 目次

新年のご挨拶	1
就任挨拶	2
学会報告等	3
教授退職記念講演会のお報せ	4
追悼	6
病院紹介	9
教室だより	11
支部だより	13
クラス会	16
十全歴史ひろば	19
同窓生の消息	22
学生課外活動支援報告	23
十全昔話	26
学生コーナー	27
編集後記	28

就任挨拶

溝上 敦博士

泌尿器集学的治療学教授に就任



平成二十八年八月一日付で、医薬保健学総合研究科 泌尿器集学的治療学の教授を拝命いたしました。

私は、北九州市の小倉高等学校を卒業後、産業医科大学に四期生として入学し、昭和六十二年に卒業しました。泌尿器科は高齢化社会に非常に重要な領域であると思われましたので、卒業後の進路として泌尿器科を選択しました。入局後まもなく、当時教授であった杉田篤生先生から、分子生物学教室の大学院生として研究を開始しました。ところが、分子生物学教室には医者がおらず、癌の研究は全く行われていませんでした。そこでホヤの発生を研究していた先生のもとで分子生物学の知識を学びながら、私の手の中で動かせる研究テーマを一年間かけて探ししました。その結果、ホルモン依存性、造骨性骨転移など生物学的におもしろい特徴がある前立腺癌を研究テーマに選びました。しかし、研究を行うおうにも、当時ホルモン応答性前立腺癌細胞株は日本に

はなく、海外から輸入しなければなりません。またホルモン療法の本となるアンドロゲン受容体 (AR) cDNAもUSAで発見直後だったため、発見したラボに手紙を書き、cDNAを送ってもらいました。市販のAR抗体もなく、大腸菌にAR cDNAを導入してARを合成精製し、ウサギを免疫してAR抗体を作成するという、すべて自前で研究をしないといけないという状況でした。しかし、大学院卒業時には基本的な知識・技術が身につく、AR cDNAを発見したラボにも留学し、基礎研究、留学のおもしろさを実感することができました。

留学後、金沢大学泌尿器科学教室の基礎研究を向上させてほしいという並木幹夫名誉教授からのご依頼があり、平成十二年に金沢に参りました。金沢大学では、院生とともに前立腺癌の基礎研究を行い、前立腺癌への高線量率組織内照射や泌尿器科系の手術、ホルモン療法、化学療法などの臨床も行ってきました。臨床を行うにあたり、基礎研究で培われた思考過程は非常に有用であると思っています。

教授職について思ったことは、泌尿器科学教室だけではなく、大学全体、グローバル化のことも考えていかなければならないという立場にあるという責任の重大さです。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

岡本 安雄博士

川崎医科大学薬理学教室教授に就任



この度、平成二十八年八月一日付で川崎医科大学薬理学教室の教授を拝命いたしました。私は、平成四年に富山医科大学を卒業し、京都大学医学部薬理学教室（真崎知生教授）で学位取得後、米国サウスキャロライナ医科大学生化学教室 (Yusuf A. Hannun教授)、香川医科大学（現香川大学医学部 生化学教室）（上田夏生教授）で教育と研究に従事し、平成十九年四月より金沢大学医学部血管分子生理学教室多久和陽教授の下で生理学

の教育と研究を行ってまいりました。約九年間多久和教授をはじめ多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

新任地の川崎医科大学（岡山県倉敷市）は昭和四十五年川崎祐宣先生により開設され、建学の理念である「人間をつくる」、「体をつくる」、「医学をきわめる」により「良医」を養成してきました。また、川崎医大はOSCE（客観的臨床能力試験）を日本で初めて導入したことも知られています。私は川崎医大では薬理学教室を担当しますが、金沢大学医学部で学ばせて頂きましたことを充分に生かして、学部教育、研究に取り組みたい所存です。最後になりますが、金沢大学医学部十全同窓会の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

秋の叙勲

旭日双光章

長谷田 祐一 (昭和四十六年卒業)

村本 卓郎 (大学院)

瑞宝双光章

白井 明生 (昭和三十六年卒業)

## 「メディカル・イノベーション推進人材の養成」 平成二十八年度合同フォーラムの報告

平成二十五年度に文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業のテーマAとして本学が採択された「第三の道…医療革新を専門とする医師の養成」の四回目のシンポジウムを兼ねて、表題に示すテーマAに採択された全国一〇大学による合同フォーラムを、平成二十八年九月二十六日(月)十三時から、十全講堂において主催しました。事業関係者四名を含む三〇三名の参加者があり、盛況のうちには終了しました。

山崎光悦学長による開演ご挨拶、文部科学省の佐藤人海大学院支援室長によるご挨拶に引き続き、まず本学の山本



博理事より、「イノベーションが受け継がれる街、金沢〜」と題して、本学や金沢、石川における明治以来の医療革新について紹介する講演がありました。続く特別講演では、金子周一研究域長の座長のもと、現在米国S&R財団理事長、ジョンズホプキンス大学理事、マンズフィールド財団理事の久能祐子氏より、「日本人女性科学者の挑戦〜研究者から起業家へ、そして社会的インパクト創生へ〜」と題した講演がありました。基礎研究の成果を創業につなげ、日米両国で起業を行い、新規医薬品(レスキュラとアミテイザ)を開発された久能先生の経験に基づくお話を伺い、本事業のめざす日本発の最先端医療の開発と実用化を実現できる人材を養成するという目的をあらためて確認するとともに、その実現のために多くの示唆をいただくことができました。続く久能先生と学生との懇談においては、自信をもってチャレンジすることの必要性が、次代を担う学生に伝わったと思います。続く一〇大学デイスカッションは、絹谷清剛教授の座長のもと、教職員と学生、さらに企業の方も交えた複数のグループに分かれてデザインシンキングの方法に基づいて行われました。各選定大学よりこれまでの実績や独自の取組み、今後の計画等をご紹介いただいております。今後の参考にするともに、共通の問題点とその解決策を話し合い、今後定期的に情報交換を行って共通の教育システムの構築に努力することが同意されま



した。最後に井関尚一プロジェクトリーダーが閉会の挨拶を行いました。今回の合同フォーラムの開催が、今後各選定大学が拠点となつて周辺の大学に事業を普及させ、また事業の成果及び存在意義を国に対して、また全国の大学、研究機関、医療機関や製薬・医療企業の関係者等にアピールしていくうえで貢献する事を期待します。当日の運営にご尽力くださったメディカル・イノベーションコースプログラムマネージャーメント室の教職員ならびに宝町事務部の皆様に感謝いたします。

(井関 尚一 記)

## 金沢大学医学部 十全同窓会会員情報変更サイトが 新しくなります

LOGIN 情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせいたします。  
今後お届けする郵便物は慎重にお取り扱い下さいますようお願い申し上げます。

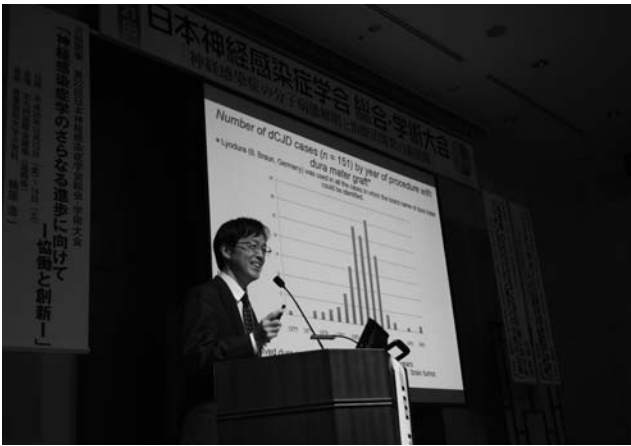


## 第二十一回

## 日本神経感染症学会総会・学術大会

平成二十八年十月二十一日～二十二日の二日間、金沢東急ホテルにて、第二十一回日本神経感染症学会総会・学術大会（会長・山田正仁教授）を開催いたしました。翌日の十月二十三日が「金沢マラソン二〇一六」であり、宿不足を懸念しておりましたが、二百八十名の参加を得て、盛会裏に終えることができました。

今学術大会は、「神経感染症の分子病態解明と治療法開発の新展開」をテーマに、基礎研究から臨床研究、症例報告まで幅広い内容について取り上げることができました。会長講演では山田教授



が「病原性Creutzfeldt-Jakob病におけるプリオン及びプリオン様タンパク質の伝播」について講演し、特別講演では理化学研究所の田中元雅博士が「プリオン様タンパク質の感染性の本体とその生成分子機構の解明」について講演されました。また、「進行性多巣性白質脳症の診断・治療の新展開」、「感染因子による神経免疫疾患誘発のメカニズムと治療」、「小児急性脳症の分子病態と診断・治療」、「非ヘルペス辺縁系脳炎の分子病態解明と治療法開発」の四つのシンポジウムを開催し、最近特に話題となっている「ジカ熱とデング熱」、「小児の急性弛緩性脊髄炎」、「The role of the microbiota in neurodegenerative disorders」という三つのテーマをホットトピックスとして講演して頂きました。さらに、「一日でわかる神経感染症—神経感染症の基礎から最新情報まで—」と題して、「中枢神経系でみられるウイルス感染症」、「中枢神経系の細菌感染症」、「結核性髄膜炎の診断と治療」、「寄生虫による成人の中枢神経系感染症」、「プリオン病」、「抗レトロウイルス療法中のHIV神経合併症」、「神経感染症の画像診断：Case-based Review」などの教育セミナーを行いました。一般演題も六十八演題を数え、多くの医師および研究者に日頃の成果を発表して頂きました。一般演題には、なかなか経験出来ない神経感染症の症例についての貴重な症例報告が多数含まれており、活発な議論が交わされました。

また、ホットな研究テーマに関する基礎・臨床研究に関する演題が数多く発表されました。その中で、学会理事による投票で、特に優秀であったと認められた演題については、基礎・臨床研究部門と症例報告部門とに一演題ずつに学会賞が授与されました。さらに、研修医や学生による発表で優秀であった一演題について会長賞が授与されました。

二日間にわたって活発に議論して頂き、参加された先生方の記憶に残る素晴らしい学術集会となったものと自負しています。本学会の開催にあたりましては、神経内科同門の先生方をはじめ、十全同窓会会員諸氏のご支援を頂きました。深謝いたします。

（浜口 毅 記）

## 教授退職記念講演会のお報せ

謹 啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて 金沢大学医薬保健研究域医学系（組織細胞学研究分野（旧解剖学第一））井関尚一教授におかれましては 平成二十九年三月三十一日をもって医学系教授を御退職されます

それによりまして その御高徳と御功績に対し感謝の意を表したいと存じ 左記のとおり記念講演会を挙行することとなりました つきましては 御多用のところ誠に恐縮ですが 記念講演会への御臨席を賜りますようお願い申し上げます

謹 白

平成二十八年十二月吉日

金沢大学医薬保健研究域医学系長 多久和 陽

## 記

## 一、記念講演会

日 時 平成二十九年三月三日（金）午後四時三十分から

場 所 医学類G棟二階 第三講義室

演 題 「基礎医学四十年、金沢大学三十年」

（記念講演会後の記念式は行いません）

事務担当 医薬保健系事務部総務課医学総務係

（電話番号 〇七六・二六五・二二〇〇）

井関尚一 教授

# 医学類生の卒業判定の変革について

教育委員会委員長 市村 宏

## 一、はじめに

医薬保健学域医学類の卒業要件は、「卒業判定についての申し合せ」に定められており、「医学類生履修・学生生活の手引き」に記載されております。現在、医学類生の卒業判定に最も重要な役割を果たしているのが、「統合臨床試験」です。統合臨床試験は六年次の九月および十一月の計二回行われ、その成績で卒業できるかどうかが決まります。卒業するために統合臨床試験に合格させずればよい訳ではありませんが、本稿では、卒業試験としての「統合臨床試験」に的を絞り、その導入の経緯と内容について、概略を紹介させていただきます。

## 二、統合卒業試験の導入

平成八年に出された、文部大臣の諮問委員会である「二十一世紀医学・医療懇談会」の第一次報告の中で、「講座制の枠にとられない医学教育カリキュラムの編成が最重要課題である」との緊急提言がなされました。この提言を基に、「医学教育モデル・コア・カリキュラム」の作成が開始され、平成十三年に「第一版」が発表されました。このような講座単位の縦割り型教育から横断型教育への流れの中で、教育の評価方法も各講座単位から統合型の評価法に移行することが求められることとなりました。平成十六年度に国立大学法人に移した本学の医学部医学科（現在の医薬保健学域・医学類）

におきまして、第一期中期目標・中期計画の「学部教育」の中で、「統合型卒業試験の検討と実施」を計画いたしました。

当時の学生は、卒業試験として臨床科目試験を受験し、その結果は臨床科目試験判定会議に諮られ、医学科会議（教授会）において卒業判定が行われていました。すなわち、臨床科目の数だけ、それぞれ独自の形式で、卒業試験が行われていたこととなります。同窓会の諸先生方の時代と基本的に同じシステムが続いておりました。

平成十六年度に教育委員会において、統合型卒業試験の導入に向けて検討がなされ、「平成十七年度に、まず内科と外科がそれぞれ統合試験を行う。その後、結果を見て全体に広げるかを検討する。」という方針が決定されました。平成十七年度には、平成十六年度の医師国家試験結果が芳しくなかったことを受け、更なる検討がなされ、以下の事項が平成十七年六月の医学科会議で承認されました。

- (1) 夏季休業終了後、九月と十月に科目評価の試験「ベッドサイドラーニング（BSL）評価試験」を行う。
- (2) BSL評価試験の再試験又は追試験は一回まで。従来の卒業試験判定基準でもって判定する。最終判定は十一月末までに行う。
- (3) BSL評価試験合格者は、統合卒業試験を受ける。
- (4) 統合卒業試験は十二月に行

う。再試験又は追試験は一回まで行う。(5) 最終の卒業認定は、BSL評価と統合卒業試験評価でもって決定する。(6) 統合卒業試験はブループリントに基づく項目・評価領域に従う卒業試験であり、国家試験問題に準じる。各関係部署より問題を提出し統合した問題を作成し、一～二日かけて行う。

このようにして、統合卒業試験の試行が始まりました。平成十七年度には、従来の卒業試験は廃止せず、BSL評価試験に準ずる内容を実施し、それに不合格となった学生も統合卒業試験を受験できるとし、かつ、統合卒業試験は、参考資料という位置づけでした。

その後、平成十八年度の試行実施を経て、「卒業判定についての申し合せ（平成十九年四月一日付施行）」が制定され、平成十九年度から統合卒業試験が本格実施となりました。

## 三、「統合臨床試験」の導入

本学の卒業試験制度は、平成二十六年に更なる転換期を迎えることになりました。これまでの医師国家試験の結果や統合卒業試験の成績から、本学の各卒業試験にすべて合格し卒業した学生の中心に、統合卒業試験の成績が大幅に不良で、医師国家試験に合格しないレベルの学生が存在することが明らかとなったからです。これを受けて、教育委員会で、現行の卒業判定制度「最終の卒業認定は、BSL評価と統合卒業試験評価でもって決定する」が妥当であるのかについて詳細な検討がなされました。そして、「統合卒業試験の成績のみで卒業を判定する。統合卒業試験の判定制度を確保し、かつ学生の横断的学習を促進する目的で、統

合卒業試験を二回実施する。ただし、六年次で、現在、各卒業試験を実施している期間に相当する時期には、毎日午前中二時間程度、医学教育を総括する講義を実施する。」という方針が示されました。

その後、いくつかの技術的な課題が話し合われました。新統合卒業試験を卒業の必須条件とするためには学則等の変更が必要ことから、統合卒業試験は六年次科目のクリニカル・クラークシップの評価試験として実施されることになり、「統合臨床試験」に改称されました。続いて、「卒業判定についての申し合せ」の改正が承認され、現行の統合臨床試験が平成二十七年から開始されました。

## 四、おわりに

卒業試験の重点は、各科個別の臨床科目試験から医師国家試験を意識した各科横断型の統合型試験「統合臨床試験」にシフトしており、BSL修了時に各科目別の試験を課す科はほとんどなくなっています。一方で、学生のアンケート調査では、統合臨床試験を、まるで医師国家試験の模擬試験のような位置づけで捉えている学生も見受けられ、卒業試験としての「統合臨床試験」の意義を、適切に、また十分に学生へ説明する必要性を感じているところ です。

最近の大学評価では、学生の質保証が強く求められております。医学教育カリキュラムの質の改善に努力すると共に、学生の達成度評価に相応しい卒業試験のあり方について改善を重ねていく所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

# 永野耐造名誉教授を偲んで

法医学教授 塚 正彦



金沢大学名誉教授、金沢大学大学院医薬保健学総合研究科法医学教室第四代教授永野耐造先生は、平成二十八年八月二十五日に肺炎のため享年八十六歳で逝去されました。以下、直接指導を受けた高弟大島徹前主任教授を差し置かず、追悼文を記させて頂きます。

先生は昭和六年二月十一日高知県のお生まれで、昭和二十三年和歌山県立医科大学に御入学、御卒業の後に昭和三十五年同県立医科大学で『焼死の医学的研究』により医学博士を授与され、昭和四十一年七月和歌山県立医科大学法医学教授に就かれました。その十三年後の昭和五十四年四月、金沢大学法医学教室教授に着任されています。研究内容は、高度焼損死体に関する法医学診断学

的研究や血液型物質の熱抵抗性に関する法血清学的研究を突き詰め、血液型抗原の細胞内局在に関する組織・細胞学的研究と法医学的薬毒物の迅速スクリーニングに関する研究を極められました。具体的内容として、当教室古畑種基初代教授ゆかりの血液型として世間一般にも馴染みが深いA O B式や親子鑑定で用いられるM N式等の基本的な血液型活性が、家屋火災等の高温下でも安定であることを示し、これにより高度焼損死体についても個人識別が可能であること（平成三年「Burned Bodies — From the Aspects of Medico-legal Investigation」金原一郎記念医学医療振興財団研究出版助成）を明らかにされました。学会開催に関しては、昭和五十六年四月に第三回日本法医学会中部地方会を主催され、さらに平成二年十月に故高田宮憲仁親王殿下ご台臨のもと、金沢における日独両法医学会主催第一回国際法医学シンポジウム（ISALM : International Symposium on Advances in Legal Medicine）の会長を務められました。同年七月石川県警察本部長から感謝状を受けられ、十月には国際法科学会（IAFS : International Association of Forensic Science）より表彰されています。平成四年四月には第七十六次日本法医学会総会を主催され、同年七月には中部管区警察局長より

感謝状を受けられました。そして、翌年の平成五年四月に警察庁科学警察研究所へ第十代所長として転任されましたが、平成十五年十一月日本の法医学に貢献したことが認められ瑞宝重光章（同年栄典制度改正までの勲二等瑞宝章）の叙勲を受けておられます。その間、前出以外の著作物も多く、中でも平成十年に若杉長英先生と編集にあられた金原出版からの『現代の法医学（改訂第三版増補）』は、当大学医学部図書館で長年にわたり指定図書として学生のバイブルとなりました。また法医学実務面でも大きな足跡を残されています。「徳島ラジオ商殺し再審事件」の血痕鑑定や「山中事件」の再審における頭蓋骨骨折鑑定などの重要刑事事件の鑑定を委嘱されたことは夙に有名ですが、日本法医学百年誌発刊にあたり教室主宰期間別の解剖数を調べたところ、永野先生が主任教授を務められた十四年間に、北陸三県を中心に五百四十七体の法医学解剖が執り行われていました。並行して石川県内の警察協力医会の立ち上げにも尽力され、県内の死因究明体制を一層強固なものとししました。以上、成し遂げられた御業績に枚挙の暇がありませんが、何と申ししても特筆すべきは人材育成面の成果であり、前田均先生、田中宣幸先生、辻力先生、大島徹先生、近藤稔和先生といった数多くの優秀な人材を法医学の世界に送り出したことではないでしょうか。

小生が永野先生と直接お話しさせて頂いた機会は限られております。法医学の専門に足を踏み入れた頃と、教授就任時にそれぞれ励まし言葉の賜るのみで、三回目には無念にも佐野台の御霊前に手

を合わせることにあいました。ただし一度一度の拝顔が誓いを立て、支えを得るに充分なものでした。また別の機会に縁あって永野耐造先生の師錫谷徹北海道大学名誉教授の著書（『ある大学の教師』北海道大学医学部法医学同窓会発行、昭和五十五年）を手にして、若き日の御一面を伺い知ることができました。その書物の一節は、新制和歌山県立医科大学一期生で、学生の頃から法医学教室に入りながら一人前に助手をこなす姿より、「人物も才能もまことに立派」で「その期待に背かず大いに活躍するものと信じている」と結ばれています。真に優秀な人物は、若い頃から既に優秀であるということが偲べれます。平成二十八年九月二十六日に高知で営まれた告別式の日、故郷中村は雨でした。生前交わりを持たれた真言宗石見寺住職は、永野先生を「慧眼」と「配慮」の持ち主と評し、その人物の高潔さに触れて唯々感動したといえます。御遺族様によりますと、先生は「人の痛みが心が疼く人間でありたい」を座右の銘とされ、気配りを忘れない優しい心で、自分のことより周りを大切にされたとのことです。後進の私共はその思い遣りと教えに恥じない生き方をしなくてはなりません。永野先生の御冥福をお祈りいたします。



# 松田保名誉教授を偲んで

血液・呼吸器内科学教授 中尾 眞二



金沢大学医薬保健研究域医学系 血液・呼吸器内科(旧第三内科)の松田保名誉教授は平成二十八年九月十日、八十二歳の生涯を閉じられました。

松田先生は、昭和八年十一月一日石川県金沢市に生まれ、昭和二十七年四月金沢大学医学部に首席入学、昭和三十三年三月に卒業されました。石川県済生会病院内科、金沢大学医学部附属病院第二内科助手、同講師を経て、昭和四十七年五月東京都老人総合研究所臨床第二生理研究室長に就任されました。同時に東京都養育院附属病院(現・東京都健康長寿医療センター)内科を兼務されています。昭和五十九年七月金沢大学医学部内科学第三講座(現・金沢大学医薬保健研究域医学系血液・呼吸器内科)教授に就任されました。輸血部長・高密度無菌治療部長も併任されています。平成十一年三月

三十一日定年により退職し、同年四月金沢大学名誉教授の称号を授与されました。この間、先生は長年にわたって内科学の臨床・教育・研究に努め、昭和六十三年四月より平成二年三月金沢大学医学部教務委員長、昭和六十三年四月より平成二年三月石川県医師会副会長、平成八年一月より平成八年六月金沢大学医学部長の要職も務めておられます。

松田先生は、初代教授の服部絢一先生が築かれた骨髓移植の伝統を継承しつつ、ご自身の専門である血栓止血学を大きく発展させられました。教授就任早々に血液凝固研究室(現・血栓止血研究室)を新設され、その結果、教室の臨床・教育・研究の幅が広がり、数多くの業績が生まれました。それらの業績が評価され、多数の学会で理事を歴任されることも、昭和六十三年六月第十一回日本バイオレオロジー学会、平成五年十月第三十一回日本内科学会東海北陸合同地方会、平成八年十一月日本動脈硬化学会冬期大会、平成九年九月第二十回日本血栓止血学会総会、平成十年十一月第四十回日本臨床血液学会総会などの学会会長を務められました。先生のご研究内容は、血栓止血学全般に及びますが、特に播種性血管内凝固症候群(DIC)の病態解析と治療法の開発、抗リン脂質抗体症候群の病態解析、動脈硬化性疾患の病態解析、先天性血液凝固異常症の遺伝子解析において優れ

た成果を挙げられました。昭和五十一年にはベルツ賞「Cerebral vascular diseases including pathophysiology」を受賞されています。昭和六十三年度より平成四年度厚生省特定疾患血液凝固異常症調査研究班の班長として、また班長在任期間の前後には班員として、血栓止血学とくにDICの臨床と研究をリードし、日本におけるDICの臨床と研究のレベルを世界一にまで引き上げました。特に、分子マーカーを駆使したDICの病態解析手法は高く評価され、現在のDIC病型分類の概念へとつながっています。厚生労働省DIC診断基準(昭和五十五年)の作成にあたっては松田先生が中心的役割を果たされ、この診断基準は現在も日本で使用されています。平成十三年には国際血栓止血学会(ISTTH)が厚生労働省の診断基準を模倣してDIC診断基準を発表しました。これは、日本におけるDICの臨床・研究レベルが、松田先生の貢献によって世界のレベルよりも二十年進んでいたことを示しています。

松田先生は数多くの論文・著書を発表することによっても、日本における血栓止血学の発展に貢献されました。代表的な著書(単著)には「DIC症候群」(中外医学社、1976)、「改訂版DIC」(完全改訂版)(中外医学社、1979)、「凝固と線溶」(中外医学社、1980)、「DICの臨床」(新興医学出版社、1983)、「止血・血栓の臨床」(新興医学出版社、1986)、「DICの臨床」(新興医学出版社、1997)などがあります。また、一般の方を対象とした「キリンの血圧はなぜ高い―血液学最前線―」(小学館文庫、1999)はベストセラーになりました。

教室員には常に臨床の重要性を強調されました。それが臨床だけでなく基礎研究をも推進させ、在任期間中に五十九編の学位論文を含む二千五百編の論文発表につながりました。松田先生の明るく温厚なお人柄、人を引き付ける笑顔、医学領域にとどまらない博識は多くの医学生を魅了し、教室の規模が大きく広がりました。他大学にも松田保先生ファンがたくさんおられました。私自身は、アメリカ留学から帰学した平成元年から、松田先生が退官されるまでの十一年間に亘って薫陶を受けました。様々な思い出がありますが、私が教授に昇任した際に、「いろいろな人に気を遣って譲歩するのはよいが、これだけは譲れない」という信念を持ち続けなさい」と言われたことが心に強く残っています。

先生は学問だけでなく、多くの趣味に生きる方でもありました。地元のMROラジオ番組「市場ジョッキー」では週に一回ゲストコメントーターとして出演され、医学領域に加えて、映画、音楽、歴史、文学、など、様々なお話で人気を博しました。また、コントラクトブリッジはSenior Masterの段位を持つほどの腕前でした。ご自身がOBである金沢大学医学部弓道部の顧問も長年担当されました。内科学の臨床・研究・教育に全力を注がれ、世界に通じる成果を挙げられるとともに、学生教育にも熱心に取り組まれました。弟子として、松田先生の大きなご功績に深甚の謝意を表すとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。なお、本追悼文は松田先生の一弟子である高密度無菌治療部朝倉英策准教授と共に執筆したものであることを申し上げます。

# 亡き津川洋三 先生を偲ぶ

竹田 亮祐



津川洋三先生が平成二十八年七月十六日に九十歳の生涯を閉じられた。長寿を全うされたとはいえ、私への最後のお言葉「あの短歌は歌集にされないのですか」を思い起こすと、頻りに悔恨の情と懺洗の想いがめぐり、み霊安かれと願うばかりである。

三年前、無念にも先生にとつてまことに驟至（驟雪・第五歌集名）の病に臥されるまでは常々「生涯現役」、「生涯勉強」（津川博一さんお通夜の言葉）の日々を送って来られた。

先生は平松博教授のもとで放射線医学を専攻され、昭和三十年、父君（津川龍三・元金沢陸軍病院長）の医院を継承された。実地医家としてのみならず北国文化を代表する知識人で、かつ歌人として短歌の同人誌「新雪」を主宰され（昭和五十五年）第九回「泉鏡花記念金沢市

民文学賞」、第五十回「金沢市民文化賞」、平成十二年には第五十一回「北国文化賞」を受賞された。津川先生の文才は在京の若き麻布中学時代に芽生え、先の受賞時の感想で「短歌に関心を寄せたのは中学三年」。当時、軍医だった父の関係で東京・麻布中学に通っていた。上級生に吉行淳之介、下級生に北杜夫。文人を生む環境にあった。文芸部に席を置いた。」と述べられている。次で四高の時代には、ハーデイ研究会・会長とThomas WolfeのLook Homeward, Angel: 天使よ故郷を見よ」の翻訳（昭和三十年、新潮社）で有名な大沢衛先生の短歌会で、秀れた才能を発揮された。津川先生の刊行された短歌集は第七集（山靄集、惜春鳥、雪翳、表音文字、驟雪、雪洞、連峰の雪）を数えた。また、金沢医科大学時代に文芸誌「学窓」を継いで発行されていた「学芸雑誌」にも何度か寄稿され、最終号・昭和二十六年（一九五二）には「韻律の回顧」について研究論文ともいへば細を穿った文が異彩を放った。「文華」（終戦後いち早く刊行された）の十六号には「文子の家―小説」を、北国新聞では「やはらかき耳朶」評が文芸欄を賑わせた。さらに金沢大学保健管理センターの顧問として長年にわたり尽力され、私も所長の頃忘年会をもとにさせていただいた。この功績で平成十二年に「地域文化功労賞・大臣表彰」を受賞された。十全同窓会会報では、会報百五十周年記念座談会（平成二十四年一月十七日発行）において「会報創刊のころ」を回顧し、創刊号発行に尽力された級友・矢部健治先生を偲んでおられる。

わたしは第四高等学校時代から日置内科時代まで先生の弟君である金田善三先

生とご縁があったことに甘え、わたしの拙いエッセイ集「笠舞雑記―その四」のまえがきをお願いした際には過分の贅辞をいただいたこと、わたしの未熟な短歌（二百余首、平成五年）の試みに懇切丁寧な添削を加えていただいた借光を忘れることはできない。

先生の短歌への情熱は上記の如く麻布中学時に始まり、一生をかけ自然の、あらゆる物象の細やかな観察を素直な感性で表現する真の歌詠みを貫かれたが、その元は万葉集の編者・大伴家持の情感到根差しているように思われる作がある。

天平の時代（天平十八年〜天平勝宝四年）越中の国守であった家持の歌心をは、次の五首を詠んでおられる（家持は急速に没落しつ、あつた古の大貴族の、もつとも悲劇的なひとりである。父の旅人はそれでも大宰師まで進んだが、家持の官位は父にすら劣り越中守に任じられたにすぎなかった（江藤淳 近代以前文芸春秋 平成二十五年）。

海へだて雪に輝く連峰を

振り放けやまずわれの家持

連峰の稜線はうすく引くのみに

裾野をひろく霞つつみたり

家持が水遊びせし湖失せて

残れる濁に鬼連の生ふ

越中の国守といへど男盛りの

单身赴任は切なかりけむ

水見港に水揚げ多き潤目鱸

国守家持も食せしならむ

津川先生といえは、いまひとつ想起されるのは米国の行ったビキニ環礁・水爆実験による被爆障害のニュースである。昭和二十九（一九五四）年三月十七日の北国新聞第一面には「原爆とはや、

異なる 灰に秘む初の「水爆脅威」邦人漁夫被爆事件全員が放射能症状の見出しのトップ記事で取り上げられ、「きのう金澤に入荷 カジキに強放射能」について平松教授談話のほか津川、熊野が近江町市場で第五福龍丸から搬送されたカジキマグロの放射能検査にあつたことを報じている。このビキニ水爆実験による放射能汚染に関して、津川先生は日本放射線医学第九回北陸部会において発表した内容を「放射能症の疑いとした二つのケース」と題し十全医学会雑誌57:367-376, 1955（津川洋三・清水卓蔵）に記載された。

その結論によれば「ビキニ水爆汚染海域を航行した神通丸乗組員四名、並びに天水持続飲用三重県神島灯台守一家四名を診療し白血球増多、白血球減少、リンパ球増多などを認めたのでこれを報告し、この原因が微量放射線によつて発現した放射能の一種であろうとするために討論を加えた」であつた。

お通夜の夕、津川家の菩提寺・教王寺の住持は、津川先生から文字や語彙の間違ひについてご教示をいただき、後年畏敬の念を抱いていたことに言及された。先生は、歌集「連峰の雪」のなかで

宗教も科学も所詮おのおのの

感性に触れかよふものらし

の一首を詠んでおられる（感性とは感覚的直感表象を受容する能力:kan）。近年、科学と宗教についての論議が盛んななか Stephan Jay GouldがNon-Overlapping Magisteria: NOMA（相互非干渉の領域）と解釈したところを、それぞれ感性に触れかよう領域として表現され、いかにも理と文を究めた先生らしい歌と感じている。



病院紹介

公立つるぎ病院

当院の沿革

当院の始まりは昭和十五年に旧鶴来町に開院した加賀東病院です。昭和三十一年に鶴来地方国保団体連合会鶴来病院、昭和四十二年には鶴来総合病院と設置母体の変化とともに名称を変更してきました。平成十二年に現在の場所に新築移転し、呼称を「公立つるぎ病院」と改めています。平成十七年市町村合併に伴い白山石川医療施設組合に加入、平成二十年公営企業法の全部適用により白山石川医療企業団公立つるぎ病院となりました。

当院を取り巻く環境

当院は日本海から霊峰白山までの南北約五〇キロメートルに及ぶ白山市の中央、手取川が作った扇状地である加賀平野のまさしく扇の要のところに位置します。当院より北側には加賀平野が広がり、南の山側は手取溪谷をはさんで、旧白山ろく五村が点在する南加賀では唯一のへき地です。白山ろく地域は日本全国の他のへき地と同様に高齢化率が高く、住民の二人に一人が六十五歳以上の超高齢化社会となっています。このような地理的、社会的条件の中で当院は、高度先進医療や救急医療に重きを置く公立松任石川中央病院、白山ろくに展開する吉野谷、中宮、白峰の三診療所とともに白山石川医療企業団を形成し、共通の理念のもとに、それぞれの役割を果たすよう努力しています。

当院の現状と取り組み

病床数は合計一五二床です。内訳は一般病床四五床、回復期リハビリテーション病床二六床、医療療養病床二七床、地域包括ケア病床五四床となっており、ケアミックス型、地域密着型の病院です。五感に優しいアメニティホスピタルのキャッチフレーズのもとに、屋上には庭園を配し、また各病室などの入り口には、鶴来・白山ろくの風景や施設などが描かれた九谷焼の陶板を展示して、癒しの創出に努めています。

平成十八年より回復期リハビリテーション病棟を開設し、平成二十二年にはリハビリテーション棟を造設しました。相前後して介護療養病棟の廃止、ショートステイの中止など介護系のサービスはダイケア一本に絞り、リハビリテーションを中心に据えた組織運営を明確にしています。その後回復期リハビリテーション病棟は三六五日リハビリテーションを標榜するようになり、また訪問リハビリテーションも積極的にを行い、年々需要は増大している状況です。このように地域のニーズを十分に反映させた形で病院事業を展開してきましたが、さらに一歩前進するため、平成二十四年に厚労省の在宅医療連携拠点事業を受託しました。近隣医療機関、介護施設、薬局、高齢者支援センターとともに鶴来・白山ろく地域での地域包括ケアシステムの構築に努めてきました。その成果は国立長寿医療研究センターが発行しました「在宅医療・介護連携のための市町村ハンドブック」に取り上げられています。拠点事業の中で、中核をなした活動は平成二十五年度以降も活動を継続し、白山市全体で活動

する白山市在宅医療連携協議会へと引き継がれました。当院も在宅医療の支援病院として白山市在宅医療連携協議会に積極的に参加するとともに、平成二十六年十月から、地域での当院の役割をより積極的に果たすために地域包括ケア病棟（五四床）を導入しました。さらに院内（認知症）サロンとも言うべき「げんきサロン」、院内認知症支援チームなど、今問題となっている課題に病院全体で積極的に取り組んでいます。

当院の課題

当院の課題は、平成二十五年度より業務成績が大きく悪化に傾いたことです。様々な要因がある中で、最大の要因は内科、小児科、整形外科などのつるぎ病院の診療の中核を占めていた医師の退職や移動が相継ぎ、医師数が大幅に減ったことでした。以前の状態へ医師数を戻すことは難しく、現在勤務している医師の高齢化の問題も併せてあり、病院として医師の確保は今後も継続して取り組んでゆくべき重要な課題と認識しています。

最後に、当院は開院当初から鶴来・白山ろく地域を念頭に医療・介

護を展開してきました。開院以来七十六年たった今も、この地域に対する思いは受け継がれてきています。さらに白山石川医療企業団の一員としても、白山市における当院の役割を十分認識して、その使命も果たす心積もりです。

（病院長 杉本 尚樹 記）



## 病院紹介

### JCHO福井勝山総合病院

当院は福井市から東へ約三〇km離れた、福井県の東北部の勝山市にあり、南東は大野市（雲上の城で有名な大野城がある市）、南西は永平寺町（有名な曹洞宗大本山・永平寺がある町）、北は石川県（の山岳）に隣接した自然豊かな山間地域の病院で、奥越地域（勝山市と大野市を合わせた人口約六万の二次医療圏、面積は福井県の四分の一を占める）唯一の公的基幹病院です。勝山市では数多くの恐竜化石が発掘されており、世界三大恐竜博物館の一つとして有名な県立恐竜博物館や西日本一の規模を誇るスキー場のスキージャム勝山、奈良の大仏を上回る大きさの越前大仏等の観光資源が病院近隣には豊富にあります。

当院の前身の開設は昭和二十一年で、社会保険診療の模範的診療を使命とした「健康保険勝山病院」からスタートしました。昭和三十三年には社団法人全国社会保険協会連合会へ経営委託され、公設民営の「社会保険勝山病院」に、更に平成十一年には現在の地に新築移転し「福井社会保険病院」へと名称変更はあるものの、社会保険病院として長年に亘り奥越の地域医療を支えてきました。平成二十六年四月からは、三つの公的病院グループ（旧社会保険四十七病院、旧厚生年金七病院、旧船員保険三病院の計五十七病院）が合体して、新設の独立行政法人地域医療機能推進機

構 (Japan Community Health care Organization: 略) JCHO、ジェイコーと呼びます) が直接運営する公設公営の病院グループの一つとして、更に「JCHO福井勝山総合病院」と名称変更して新たなスタートを切りました。

当院は十七診療科を標榜する百九十九床（一般急性期三病棟百五十八床、回復期リハビリ一病棟四十一床）の五階建て中小規模急性期病院です。健康管理（健診）センター、人工透析センター（十八床）、附属介護老人保健施設（百床）、居宅介護支援センター、訪問看護ステーション等も併設しているので、疾病予防（健診）から急性期医療、回復期リハビリ、介護・在宅医療まで切れ目のないサービスの提供が可能で、奥越の地域医療・地域包括ケアの要として、開業医の先生方や行政、大学、福井市の基幹病院等と積極的に連携を図りつつ、地域住民の方々安心して暮らせる地域づくりに貢献しています。

標榜する十七診療科の内訳は、（総合）内科、消化器内科、循環器科、呼吸器内科、腎臓内科、外科、脳外科、整形外科、耳鼻科、泌尿器科、小児科、皮膚科、麻酔科、放射線科、眼科、産婦人科、リハビリテーション科で、医師数は常勤医二十五名（健診センター常勤一名を含む）と非常勤医三十六名（病理非常勤二名を含む）です。当院は二次医療圏である奥越地域唯一の基幹病院ですので、二次救急指定病院として、医師会の先生方と連携を図りつつ、奥越の急性期医療や救急医療を積極的に担い、可能な限り奥越地域完結型の医療を目指して頑張っています。また、災害拠点病院でもあるためDMAT（現在一

チーム、今年度中に二チームにする予定）を編成し、積極的に災害医療にも関わっています（東日本大震災等への派遣で厚労大臣からの表彰実績もあります）。教育施設認定では、臨床研修協力病院と十以上の学会から専門研修施設の認定を受けて、研修医教育にも積極的に取り組んでおり、総合医の研修プログラムもあります。

当院は回復期、介護・在宅医療にも積極的に関わっています。奥越地域リハビリテーションセンターとして、リハビリ・スタッフを約三十名置き、脳血管疾患（I）、運動器疾患（I）、呼吸器、がん等のリハビリを積極的に行っています。平成二十六年十月からは回復期リハビリ病棟（二）（四十一床）を新設しました。当院では脳外科や整形外科が手術等の急性期医療を積極的に行っており、当院患者や紹介患者の急性期・回復期リハビリの充実を図っています。近年の高齢化社会における国の医療・介護施策は「病院・施設から在宅へ」の流れにあります。それを先取りするように当院では以前から介護・在宅医療にも力を入れ、附属老健への短期入所や通所リハビリ、訪問リハビリ、訪問看護・診療を通じて在宅復帰への支援を積極的に行っております。

これからも当院の理念であ

る「地域に根ざし、地域から愛される病院」をモットーに、奥越住民の方々に安心と満足の医療・介護を提供して参りたいと考えておりますので、十全同窓会の先生方の変わらぬご支援とご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

（病院長 兜 正則 記）

URL : <http://fukui.jcho.go.jp/>



## 教室だより

### 麻酔・集中治療医学

#### 沿革

昭和四十一年四月に麻酔学教室と麻酔科が設置され、昭和五十三年に村上誠一教授が就任し、現在の谷口巧が五代目の教授になります。その間、平成二年には麻酔・蘇生学教室と麻酔科蘇生科に、平成十三年には麻酔・蘇生学教室が機能再生学第講座機能回復学分野に、平成二十六年には周術期管理学分野に、さらに平成二十八年には麻酔・集中治療医学分野に名称変更し、現在に至っています。現在、手術麻酔に加え、ペインクリニック・緩和ケア、集中治療部の運営にも携わっています。教員としては、医学系に教授一名、准教授一名、助教一名が配属され、病院籍医師として准教授（手術部副部長）一名、助教六名、特任助教四名、医員七名が配属されています。

**研究**  
本分野の研究は、麻酔・集中治療医学に関連した臨床及び基礎研究にります。

臨床研究としては、まず、集中治療における鎮静に関して新たな取り組みを行い、鎮静薬の投与方法および投与時間が様々な重症患者においてどのような影響を及ぼすかを検討しています。具体的には鎮静薬である塩酸デクスメトミジン（DEX）を敗血症性ショック患者に用いた場合、ショックからの離脱や炎症反応の軽減に有用であることを報告し、また、心臓血管手術後の患者に使用した際には、術後不整脈の頻度の軽減や人工呼吸からの早期離脱に役立つことを発表しています。また、DEXのせん妄予防効果に

注目し、心臓血管手術後せん妄に対する予防効果の有無に関して検討を重ねています。次に、新しい血液浄化療法を考案し、臨床で広めていく努力をしています。持続的血漿ろ過透析（Continuous Plasma Dialysis）（CPD）法は当施設で考案し、劇症肝炎をはじめとする急性肝不全患者に用いて、従来の血漿交換と効果は遜色なく、簡便で、輸血量も少なく済むことを報告しています。また、肝不全を合併した重症敗血症患者にも使用し、CPDの有用性を報告しています。今後症例数を増やし、全国に発信していきたいと思

います。さらに、血液浄化療法中の薬物動態に関しても臨床薬理動態学分野と共同で研究しています。抗菌薬であるリネゾリド、ピロピネムの薬物動態を検討し発表してきました。今後も各種薬剤による薬物動態に関して検討していきたいと思

います。**基礎研究**としては、各種ショック状態に対する全身麻酔時に投与する薬物の影響に関して追及を行っています。これまでは、敗血症性ショックモデルにおける静脈麻酔薬の影響を中心に検討し、敗血症性ショックにおける静脈麻酔薬の有用性を報告してきました。現在、出血性ショック、窒息・低酸素血症モデルを新たに作成し、各種静脈麻酔薬の影響を調べて、術前より様々な薬剤、例えば降圧薬（β遮断薬、Ca拮抗薬など）、高脂血症薬、糖尿病治療薬などが投与されている患者に手術が行われ、術中に予期せぬシ

ョック状態が起る状況を踏まえて、各種ショック状態に陥った場合、投与された薬剤がどのような影響を及ぼすかを、動物モデルを用いて詳細に検討しています。β遮断薬を内服しているラットが出血性ショック状態に陥った場合、内服していない群と比較して生存率が低下し、血圧を維持することが出来ないことを報告しています。



また、新しい血液浄化療法であるサイトカイン吸着療法を開発し、敗血症性ショックモデルにサイトカイン吸着療法を行い、生存率の改善と炎症反応の軽減を報告しています。現在、心筋梗塞等の高サイトカイン血症を起こす疾患に関してサイトカイン吸着療法の有用性を検討しています。サイトカイン吸着療法は今後臨床応用を目指し、研究を重ねています。

安全かつ適切な麻酔管理、最後の砦にふさわしい集中治療管理に貢献することを目指して新たな研究を行っています。

**診療**  
現在、手術麻酔、ペインクリニック・緩和ケア、集中治療の三部門で診療を行っています。

手術麻酔に関しては、栗田昭英手術部副部長を筆頭に、平成二十七年には全身麻酔約三千八百例、硬膜外麻酔・脊髄くも膜下麻酔約四百例を行い、麻酔科管理手術数は年々増加の一途をたっています。平成二十八年四月より手術室にハイブリッド手術室が設置されたため、新たな手術手技に対応出来るよう努力しています。さ

らに、今後の手術室増室に対応できるように麻酔科スタッフの充実に努めています。ペインクリニック・緩和ケアに関しては、山田圭輔准教授のもと、がん性疼痛、緩和ケアに重点を置き、精神的苦痛を含めた疼痛管理を行っています。平成二十八年より山田准教授は緩和ケアセンターも任せられ、がん哲学外来とともに新しい患者目線の緩和ケアを行っています。

集中治療に関しては、岡島正樹集中治療部副部長のもと、救急、外科系、内科系を問わず、年間千五百名前後の重症患者の集学的治療を行っています。平成二十八年七月には特定加算II（いわゆるスーパーICU）を取得し、二十二床を管理しています。講師一名、助教二名、特任助教八名で診療を行っています。

**教育**  
学類担当授業科目として、事故・中毒の系統講義と、麻酔・蘇生学臨床実習BSL、麻酔・蘇生学応用臨床実習クリニックカラーシップを谷口ほか当教室のスタッフで担当しています。特にクリニックカラーシップでは、患者の了承のもと末梢静脈路確保及びバッグ換気、気管挿管を行うことで興味をわき、希望する学生が多い状況です。大学院授業科目として、周術期管理特論、臨床系教育セミナー、臨床系領域融合セミナーを行っています。

**おわりに**  
麻酔・集中治療医学はこれまで多くの先生方にご支援をいただき、発展してきました。まだまだ発展途上の領域で、これからご期待に応えるべく最大限の努力をしていくつもりです。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（谷口 巧 記）

## 革新ゲノム情報学

### 沿革

平成二十六年九月一日に、金沢大学大学院医薬保健学総合研究科環境医学専攻 革新ゲノム情報学分野が開設され、教授として田嶋敦が着任いたしました。平成二十八年四月には、千葉大学・金沢大学・長崎大学の三大学が共同して教育課程を編成・実施する先進予防医学共同専攻（医学博士課程）が新設され、大学院先進予防医学研究科先進予防医学共同専攻 革新ゲノム情報学分野としての教育・研究活動も開始しております。

現在、分野スタッフとして、教授一名、准教授一名（細道一善）、助教一名（佐藤丈寛）、事務補佐員一名が在籍しております。医薬保健研究域先進予防医学研究センターのメンバー（特任助教一名、博士研究員一名、技術補佐員一名）と連携しながら、メディアカルリサーチトレーニングプログラムの医学類生四名とともに、教育・研究活動を展開しております。

### 教育

大学院教育では、革新ゲノム情報学特論（医薬保健学総合研究科・博士課程）、バイオインフォマティクス（先進予防医学研究科・博士課程）などを担当しております。また、外部講師を招いて最新の研究成果などを講演していただく「革新ゲノム情報学セミナー」を随時開催し、Euro-Tagセミナーとして認定しております。このほかにも、オミクス解析、環境と遺伝（いずれも先進予防医学研究科・博士課程）、基礎系教育セ

ナー、環境と健康総論（いずれも医薬保健学総合研究科・博士課程）、環境と健康、予防医学概論（いずれも医薬保健学総合研究科・修士課程）などの講義を分担しております。

学域・学類教育では、医学類専門教育科目として、遺伝学を担当しております。この授業は、本分野の設置を契機として新たに開講されたものです。実際に遺伝学が単位認定されますのは平成二十八年入学（現、医学類一年生）からとなりますが、医学領域における遺伝学の重要性を鑑みまして、平成二十五～二十七年度入学（現、医学類二～四年生）は、それぞれの三年次に全員受講としております。このほかには、初学者ゼミ、医薬保健学基礎、病態生理・基本的基礎配属などの講義を分担しております。

このような教育活動を通じて、遺伝継承と多様性の科学としての遺伝学の根本原理や、遺伝学やゲノム医学からの知見に基づきヒト疾病や形質の成因を理解することの重要性などを習得させることを目標としております。これにより、個人の遺伝情報の違いなどに基づく個別化医療・予防を担う人材の育成にも寄与するものと考えております。

### 研究

本分野では、各スタッフの興味に応じて、主として、生体

分子についてのビッグデータに基づく研究を展開しております。学内共同利用機器として設置されております次世代シーケンサーなどを活用して取得したデータ（ゲノム、エピゲノム、トランスクリプトームといったオミクスデータなど）に基づき、例えば、遺伝子型・表現型相関の観点から、ゲノム全域解析によるヒト疾患・形質遺伝子座の同定研究などに取り組んでおります。最近のトピックなどを以下に紹介いたします。

単一遺伝性疾患や希少・未診断疾患を対象とした研究では、国内外の大学・研究所などとの共同研究により、主として、全エクソDN A配列解析（エクソーム解析）から、種々の疾患の成因となる遺伝子変異の探査を進めております。最近では、精神運動発育遅滞および錐体路徴候を伴う小脳失調症の新規変異や、家族性過剰菌の候補変異などを報告いたしました。エクソーム解析や全ゲ

ノムシークエンス解析は、単一遺伝性疾患の原因遺伝子の探査研究において有用であるばかりでなく、遺伝学的検査・診断手段としても世界的に注目されており、平成二十七年に始動した未診断疾患イニシアチブ（IRUD）のもと、希少疾患や未診断疾患の包括的診断体制の全国配置が進められております。本分野は、小児希少・未診断疾患イニシアチブ（IRUDIP）における遺伝子解析センターとして参画しており、学内

共同研究として、ヘテロ接合性家族性高コレステロール血症罹患児におけるエクソーム解析からの分子診断事例の報告などに貢献しております。今後も、多種多様な疾患群につき、それぞれの発症に寄与する遺伝要因の特定を通じて、疾患の分子遺伝学的理解に貢献していきたいと考えております。

多因子性疾患・形質を対象とした研究では、主として、多数の一塩基多型（SNP）を用いたゲノム全域関連研究（GWAS）から、種々の疾患・形質発現に関与するSNPの探査を進めております。例えば、国内大規模共同研究から、男性生殖機能や生殖関連ホルモン濃度の個人差に関わるSNP遺伝子座を最近報告いたしました。また、琉球大学などとの共同研究により、可視的形態形質（顔面形態など）についても、特徴的な表現型に関与するSNPを同定するためのGWASも実施しております。これらの研究を通じて、生物としてのヒトの理解を深化させる成果が得られることを期待しております。また、数多くの疾患や薬剤副作用などの関連が知られている主要組織適合遺伝子複合体（HLA）に着目し、次世代シークエンスを用いたHLA遺伝子タイピング手法の確立を通じて、薬剤副作用などに関連した個別化医療実現にも精力的に取り組んでおります。

### おわりに

本分野開設後二年余が経過いたしました。これまで数多くの方々にお力添えいただきましたことに、心より感謝申し上げます。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（田嶋 敦 記）



【支部だより】

岩手支部

第二十回十全同窓会岩手支部総会は平成二十七年十月三十一日盛岡市において開催しました。岩手支部は平成二十三年の東日本大震災の際に、当時の同窓会理事長の加藤聖先生が私の勤務していた大船渡市までお見舞いにて下さったのをきっかけに、翌年二月に第一回総会を開いて支部会を設立し、今回二回目の開催となったものです。

今回は中村信一十全同窓会会長・前学長がご夫婦で来られるとのことと、岩手県在住の同窓生が現在十三人のところ十名の参加を得ました。総会に先立ち中村先生の同級生である野村暢郎支部長（昭和四十三卒業）に中村先生ご夫妻を盛岡市内の案内をしていただきました。おかげで、前学長先生の目の前ということで緊張がうかがわれたところですが、すぐに打ち解け和気藹々とした中に会が進みました。

まずは中村先生より金沢大学、医学部の現況を七十枚以上にわたるスライドを使いご講演頂きました。北陸新幹線開業により金沢市が大きく変わろうとしていること、金沢大学においてはスーパーグローバル大学創成事業とともに超然プロジェクト、先魁プロジェクトが推進されていること、医学部はその中心的役割を果たしており、宝町キャンパスの再開発など興味深い話題をお聴きしました。

また、会員の自己紹介においては卒業後二十年、三十年以上経つにも関わらず、中村教授が何人かの参加者の学生時代の



事を覚えていておられ、その記憶力に大変驚かされたものでした。

三年ぶりの開催であり、旧交を温めることもできました。平成二十六年卒業の高橋慧先生が入会され、長期海外滞在されていた高木史江先生も今回初参加していただき、メンバーも増え、岩手県支部も金沢市や金沢大学と同様に発展の期待を感じました。

金沢大学からみると日本で一番遠い支部会の一つではありますが、それだけに同窓会の団結、会員同士のつながりのありがたさを感じる会でした。

(小山田 尚 記)

前列左より 長嶺進（昭和五十六年卒業）、野村暢郎（昭和四十三年卒業）、中村前学長、令夫人、佐藤日出夫（昭和四十八年卒業）、阿部義博（昭和五十八年卒業）  
後列左より 高橋慧（平成二十六年卒業）、遠藤秀晃（平成十一年卒業）、佐々木浩行（平成二年卒業）、高木史江（平成三年卒業）、小山田尚（昭和六十三年卒業）、松原吉宏（平成七年卒業）

愛知支部

平成二十七年六月十一日（土）、十全同窓会の愛知支部総会が恒例の名鉄グランドホテル北京宮廷料理『涵梅舫』において開催されました。

今回は支部総会の記念すべき第三十回目の開催でした。吉尾豪支部長（昭和四十五年卒業）からの開会の言葉では、定期的に支部会が開催されるようになった経緯、それ以前にも有志が集う形で開催されていた本会の歴史について述べられました。

引き続き、この一年の間に逝去された春日井達造先生（昭和二十年卒業）、小林一到先生（昭和三十一年卒業）のご冥福をお祈りして出席者一同黙祷を捧げました。

同窓会本部からは理事長の大井章史分子病理学（旧第一病理学）教授（昭和五十四年卒業）をお迎えし、母校の近況について報告して頂きました。新しく設置された病院正門や、医学部の正門から十全講堂へ抜ける医学類プロムナード等、宝町キャンパスの再開発について紹介して頂きました。ハード面の整備

にあたり、多くの立ち木の伐採が行われたようです。基礎講義棟と管理棟にある大校も、伐採されるはずだったようですが、奇跡的に残されることになった経緯について冗談を交えてお話しして頂きました。また、ソフト面においては旧講座に代わって新たに免疫学と遺伝学の講座が新設されたこと、全学としてスーパーグローバル大学創成支援（SGU）事業の採択校となったこと、グローバル化・国際化を進めるため英語による教育プログラムが開始されたことなどの近況を報告



して頂きました。

記念講演は、元東京大学医学部救急医学分野教授の矢作直樹先生（昭和五十六年卒業）をお招きしました。矢作先生は学生時代、厳冬の南および北アルプス単独全山縦走など、単独行の登山に傾倒されていたそうです。昭和五十四年冬の北アルプス鹿島槍ヶ岳北峰で、雪庇を踏み抜いて約千メートル滑落する遭難を経験されました。その際に経験されたタキサイキア現象や奇跡的生還劇を始めとし、救命救急医として医療の現場で実感されてきた、最新の医学や科学をもつてしてもまったく説明のつかない事象について語られました。これらの経験を通して感じられた世界観の変化を、「臨床医からみた「この国のかたち」と題し、本来精神性の高い日本という国のあるべき姿やこれから日本が進むべき道について自身の随感をお話して頂きました。

記念写真の撮影の後、懇親会が荻野修先生（昭和二十四年卒業）の乾杯の音頭とともに始まりました。今回は前年の四十二名を大きく下回り二十八名の参加となつてしまいました。愛知支部は同窓会員も比較的多いため、今後は新規の参加者を増やし、更なる盛会を期待して止みません。

最後に今年最年少の小林玄洋先生、澤田翔先生（平成二十一年卒業）両名から、ご自身の近況報告に引き続き、万歳三唱が行われました。

（金子 佳史 記）

## 福井支部

平成二十八年八月二十八日（日）、福井県鯖江市のサバエ・シティーホテルに於いて、第六十七回金沢大学医学部十全同窓会福井県支部総会が開催されました。

例年になく猛暑の後の、逆戻り・迷走台風十号の影響を受けた小雨がちらつく午後一時から、めがねミュージアムの見学会に十名の会員が参加されました。厳しい職人の指導を受けながら、フレイム



の素材を用いてオリジナルめがね型ストラップを作る体験に感銘されました。

午後二時三十分からの総会に総数三十八名が参加され、今野利男先生の司会にて開会となりました。まず本年度物故会員八名の方に対し黙祷を捧げました。ついで土屋雅之鯖江市支部長、森田信人福井県支部長より各々ご挨拶があり、続いて来賓の中村裕之十全同窓会理事より近況報告を頂きました。金沢大学の運営体制、医薬保健研究域医学系の講座名の変更、先進予防医学・共同大学院などの広範囲な素晴らしい研究機構について説明があり、感心・感服いたしました。ついで、傘寿祝に福井市小林清二先生、鯖江市伊與曉洋先生、叙勲祝に勝山市佐々木紘昭先生、勝山市深谷桂一先生、福井市中川幾一郎先生が、奉祝されました。

続いて議事に移り、平成二十七年年度会務報告並びに福井県支部会員数、会費納入状況の報告がありました。協議事項では二十八年度会務計画（案）と予算（案）が提案され、二案とも承認されました。

午後三時三十分から講演会に移り、金沢大学医薬保健研究域医学系脳・脊髄機能制御学教授中田光俊先生より「脳神経外科疾患に対する医療の進歩」について講演を賜りました。脳腫瘍に対する覚醒下手術の有用性、脳動脈瘤に対する脳血管内手術、鼻腔から脳底部への内視鏡手術、未来に向けた素晴らしい手術術式等に、会員一同、驚愕の表情を漂せていました。

記念撮影の後、恒例の懇親会が土屋雅之先生の懇親会開宴挨拶、鯖江市の木村良平先生の乾杯にて盛大に開催されました。Fuefuki Kanayukiのフルート演奏

と川浪マキさんのピアノ演奏を聴きながら、美味しい料理とお酒を楽しみ、和やかな雰囲気のもと旧友と会話し懇親を深めて頂きました。

最後に次期開催支部の奥越地区大野市の廣瀬龍吉先生よりご挨拶があり、来年も元気な顔を見せようとお互いに約束して散会となりました。

（平井 淳一 記）

## 京都支部

今年の京都支部総会は木屋町二条の「ワインと和食の店・みくり」で開催されました。幹事の小野聡先生（昭和五十三年卒業）は自宅のワインセラーに常時百本は蓄えてあるワイン通で、今回は京都ホテル・オークラの元ソムリエが最近オープンした店を用意してくれました。ワインとそれに合った和食は参加者から好評でした。ただ今年は十三名の参加者があり、狭くて幹事の辻和夫先生（小野先生と同級生）には二人掛けを三人の真ん中で狭い思いをさせました。その分、親密に和やかに語り合うことができました。最高齢は青木昭先生（昭和二十四年卒業）です。昨年、大腸の手術をされましたがすっかりお元気なお姿を見せてくださいました。かつての京都府医師会の改革の旗頭であった青木先生は今も穏やかながらも、古武士の風格があります。福知山から松山均先生（昭和三十五年卒業）とご子息の徹先生（平成四四年卒業）が出席してくださいました。均先生は昨年、句集「由良川」を出版されました。ホトトギス同人で日本伝統俳句協会会員です。自選十句のなかに「大厄を落とせ



し札の小さかり」があります。二十七年間の句作をまとめられ、さすがしいお顔でした。徹先生は参加者の中では最少で、数年前に福知山で開催していた以来の二回目の出席です。お父さんを支える意味もあったのですが、来ていただいて本当にうれしかったです。福知山市の医療を担っておられる貫祿がうかがえました。服部正和先生（昭和四十六年卒業）が今年初めての出席です。京都市立医療センターの臨床研究センターの糖尿病研究部長をしておられます。京大の第二内科に入局後、ハーバード大学に留学され、その後日本とハーバードとを行き来し、ご本人は京都住まいですが、ご家族は今もボストンにお住まいで、三人の子供さんたちも皆アメリカで自活しておられるとのこと、服部先生も行っ

たり来たりしておられるようです。小野田秀樹先生（昭和五十八年卒業）の息子さんも金沢大学卒業で、今は兵庫県の豊岡市民病院の外科医をしておられます。親子二代金沢大学医学部卒業生が京都支部には二組おられます。桑原正喜先生（昭和四十九年卒業）は草津総合病院長の大役を終えられて、京都南部の久御山町の京都岡本記念病院の呼吸器外科の立ち上げに尽力されたあと、今は顧問として勤務されています。画像診断に造詣が深く、今までに何冊も胸部画像診断の著書を書きおられ、一枚の正面のX線写真でどれだけの情報が得られるかを、私たち開業医にもいっばい教えてくださいました。現在は、X線撮影がデジタル化されて濃度を変えることによって得られる情報が非常に豊かになっていることを生かして一枚のX線写真からの診断の精度を高めることに興味を持っておられます。教えて貰えることを楽しみにしています。今井博之先生（昭和五十七年卒業）は小児科を開業されて五年が経ち、初めは大変なことがあったが、今は落ち着いてきた、しかし開業医だけでは何か物足りないようなことをおっしゃっています。ファイターです。今後今井先生が少しずつ小野先生を支えていただき、将来世代交代にご尽力くださることを期待しています。上田義博先生（昭和四十年卒業）は今もフル勤務で地域の人の診療に励んでおられます。読書家で博学です。松本由朗先生は私の同級生（昭和三十八年卒業）で、山梨大学の外科の教授退官後、四国の丸亀の病院長をしておられますが、それも終えて読書三昧、今は池波正太郎に浸かっています。京都支部総

会でもいつも僕を支えてもらっています。若泉悟先生（昭和四十一年卒業）は馬術部で松本先生の後輩です。息子さんに譲られて今はゴルフ三昧です。若泉先生にも京都支部を見守ってもらっています。今年の中村晋先生（昭和二十九年卒業）がご欠席でした。数十年にわたって京都支部の幹事や支部長をしてください、名誉支部長としてご尽力いただきました。これからはできるだけご負担をかけないようにしますので、今後とも京都支部総会にはご出席いただけるようお願いしています。私、八田一郎は昨年は臓器入れ替えの年でした。三月と九月に左右の膝関節人工関節全置換術を受け、四月には両眼の白内障でレンズ交換してもらい、文庫本も読めるようになります。講演会でもスライドがはつきり見えるようになりました。また、地下鉄の階段も手すりを持つことなくすたすたと上り下りできるようになり、大文字山にも登れるようになりました。十年は持つそうです。ありがたいことです。米寿までしっかり使おうと思っっています（しかし、肝心の頭の方が心配）。  
徐々に出席してくださる先生方が増えてきて本当にありがたいことです。これからも地道に一人ひとりにお声掛けをし、一人でも多くの方に参加していただけるよう努力します。そして来年も盛り上がった良い会になるようにと願っています。  
(八田 一郎 記)

## 岡山支部

平成二十八年度金沢大学十全同窓会岡山支部会が十二月三日（土）、メルパル

ク岡山において盛大に開催されました。岡山支部では毎年この時期に同窓会を開催させていただいております。今回はほぼ毎年出席されている先生方に加えて、十数年ぶりに昭和五十年卒業山形専先生が参加されました。山形先生は脳神経外科医で京都大学臨床教授でもありますが、今年の四月から日本でも有数の巨大病院である倉敷中央病院の病院長に就任され活躍されております。金沢大学岡山支部会の後輩たちにとつて誇らしく思います。その他参加者は卒業年度順に昭和五十一年卒業寺沢明夫先生、平成八年卒業浅海浩二（筆者岡山支部長）、平成九年卒業高木徹先生、平成十一年卒業西川敏雄先生、平成十二年卒業梅原憲史先生、平成十二年卒業門田弘明先生、平成十二年卒業横溝智先生、平成十三年卒業杉山成史先生、の九名でした。



美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あつという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。今回も幹事の杉山先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。来年度も早めに声をかけて参加者を増やし金沢から遠く離れた岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。(浅海 浩一 記)

## 福島支部

平成二十八年十一月十九日(土)午後七時より、平成二十八年度十全同窓会福島支部総会が福島県福島市「粋酔肴」で開催されました。

十全同窓会本部より、中村裕之副理事長が出席され、母校の近況についてお話しいただきました。宝町キャンパスの整備がほぼ終わり、大学病院の玄関前に北鉄バスが入れるようになったことや、プロムナードの完成などお聞きしました。そして今年、福島支部に、大変喜ばしいことがありました。福島県立医科大学の、リハビリテーション学講座教授に大井直往先生、耳鼻咽喉科学講座教授に、室野重之先生のお二人が就任されました。更なるご活躍を願うとともに、当支部としてもできるだけだけの応援をしていきたいと思えます。福島県支部の会員は二十一名となりました。出席者は八名でありました。また、今回初めて、大学院を卒業された歯科医であり、公衆衛生学講座臨床教授 本間達也先生が参加されました。

会務報告、自己紹介の後、懇談となりました。金沢在住の中村先生や、赴任されて間もない室野先生もいらしたため、金沢の大学や街中の様子をお聞きすることができ、また、学生の頃の思い出話もあり、楽しい会となりました。

昨年、北陸新幹線が開業し、大宮乗り換えで、福島市から金沢まで、最短で四時間かからなくなりました。私も、何度か乗ってみました。近いです。大宮から「はやて」や「はやぶさ」ではなく、「やまびこ」に乗って、福島県にもお立ち寄りください。原発事故から五年が経ち、原発の近くを除いて、大部分は除染作業がほぼ終わりました。本当の復興はこれからです。(竹田 洋介 記)

写真 後列左から…清野弘明(昭和六十年卒業)、竹田洋介(昭和六十年卒業) 斉藤光正(昭和四十一年卒業)、野澤靖



美(昭和五十三年卒業)、前列左から…鈴木孝雄(昭和三十三年卒業)、中村裕之副理事長、室野重之(平成四年卒業)、本間達也(平成二十四年大学院修了)

## クラス会

### 三三三会

平成二十八年十月二十三日富山市駅前のエクセルホテル東急十五階にて三三三会を開催しました。これまではグループ別に幹事を担当していましたが、この年になると健康問題が絡んで幹事を希望するものが少なくなり、グループ別はさておき何とか会合を開きたいものと、小生の近くに住み、元気で頼りになる人を探したら、辻政彦君という素晴らしい方に気づき、共同幹事をお願いしたところ、快く引き受けいただき、無事開催できました。

この年になると年々亡くなる方も増え、今回も三人の畏友を失いました。大下睦郎君は我らのリーダーで、前々回も幹事を引き受け、私どもを多めに楽しませてくれましたが、病には勝てませんでした。深谷君は福井勝山の名士でスポーツマンタイプ。M氏によると濃厚で一度も怒ったことのない元氣なジェントルマンで、本会参加を楽しみにしていたのに誠に残念でした。松田保君はDICでその名を知られ、母校の内科教授をつとめ、小生がもつともお世話になった方でした。が、残念です。三君に黙祷を捧げたのち、宴会にはいりませんでした。

久しぶりに会った友の元氣な姿に話も弾み、和氣あいあいのうち、予定の時間を一時間近く超過してしまいました。次回は



立派に新装なった母校のある金沢で是非ということになり、再会を約束しました。出席者…伊崎公徳、江幡謙次、大場昭夫妻、小川忠邦、加藤幸三、北川正信、佐々木博也、品川俊男、竹内桂一、竹山惣一、辻政彦夫妻、鳴河弘旨夫妻、林松夫、升田義次、三木甫夫妻、八木泰夫妻、山本猛重夫妻、湯浅幹也、以上二十四名(五十音順) (品川 俊男 記)



## 第五十四回やんいち会

去る九月二十三日(金)午後五時より金沢市橋場町の金城楼で、第五十四回やんいち会(昭和三十五年医学部卒業生同級会)が開催された。時の流れは如何ともし難く、全員八十一歳を過ぎて毎年参加者は減少するものの、今年も十組の夫婦・家族を含め総勢三十二名に及ぶ盛会であった。

幹事代表半田先生の挨拶のあと、山崎・筑田両先生の掛け合い司会で総会を開き、これまで毎年開催してきた会を、今後いかに続けるかについて議論した。いろいろな意見はあるものの、出席者の多くは「金沢で毎年開催してほしい、都合のつく限り参加したい。」との思いが強いので、その意思に沿って開催時期・次第は金沢在住幹事に一任することとなった。二年前に改訂された会員連絡網にも逝去者を含めて不都合が生じているので、その改訂作業を作成者である畑尾先生にお願いした。近年、葬儀の形式も多様化しているので、今まで会員逝去の弔慰金として集められた基金も、今後、会員相互の連絡費・会議費として活用できることとなった。

六時、記念撮影のあと宴会に移る。お互いの近況報告、不参加の方の消息話に花が咲き、奥方同士の話し合いも賑やかで、二時間の時が瞬く間に過ぎる。さらに別室に席を移して二次会にはいる。同じ医学の道に進んだ同志であるが、卒業後半世紀を過ぎて、仕事は次世代に託し、今はお互い身体に何らかの不具合を抱えた身なので、どんな話題も他人ごととは思えず、感慨深い集まりとなった。

すべてを記録に残す思いが強いので、今回の参加者名簿を敬称略で以下に記す。石政、内山、風間、河田、木南夫妻、熊谷夫妻、佐藤夫妻、篁夫妻、筑田夫妻、中島夫妻、布谷夫妻、野田、畑尾夫妻、半田夫妻、藤井家族、本多、水村夫妻、



山崎夫妻、横浜、計三十二名。午後九時、次回の再会を約して散会した。(佐藤 保 記)

## 「よんいち」同窓会

我々昭和四一年卒業生は「よんいち」と自称して、ほぼ定期的に同窓会を開催している。平成二十八年十月八日(土)は卒業後五十年の記念同窓会となった。場所はANAクラウンプラザホテル金沢で、同伴者も含め四十五名の参加であった。当日は朝から雨模様が続く、会の始まるころはかなりの風雨となったが、午後六時の開宴時刻に遅れる者はおらず、予定通りの開宴となった。幹事の渡辺君の挨拶で宴が始まり、藤舎真衣社中による「祝いの曲 獅子」の演奏がうたげの冒頭を飾った。幽艶でみやびな雰囲気をかもし出し、参加者全員が「ああ、金沢にいたんだな」といった感激に浸ることが出来たのではなからうか。

そして、記念講演として母校の名誉教授竹田亮祐先生をお招きし、お祝辞に加えて、明治維新を挟んで今日までのわが国の医学分野も含めた各分野の偉人たち、西周や森鷗外をはじめ、世にそれほど広く知られているとはいえない多数の人物を挙げられて、今日の世情の動きに対する警告めいた卓説を拝聴することが出来た。そして喜寿を迎えんとする我々に対し、なお前向きな姿勢を求められたのである。会の進行上ご講演の時間を限らざるを得なかった幹事側の事前の申し出が、今さらながら惜しまれてならない。ただ、先生の卓説の一部は、今回発刊する「よんいち第四号」の巻頭に載せてあ

るので、一縷の救いとなっている。

続いて会員一人ひとりの近況報告に移ったが、嚙矢に福島在住の斎藤君が五年前の大災害、原発事故の実態を報告された。淡々と、ユーモアさえ交えた話ぶりではあったが、聞く者全員が今もって忘れてはならないほどの大きな戒めを突きつけられた観がある。会員諸氏(幹事を除く)の話は、一つは現在の仕事のこと、思い出、余暇の話に加えて、年齢が言わしめるものか、自身の持病について嘆きかつ楽しむ心地が披露され、それぞれが身に関わる事柄として重く受け止めざるを得ない心境に襲われた。我々「よんいち」生は、入学時は「安保闘争」、卒業時は「インターン闘争・国試ポイコット」と、国内政治の渦に巻き込まれた時代に遭遇している。中にはその結果、その後の人生の方向に想像以上に大きな影響を受けた者も少なくないのだ。そういった悔悟めいた感慨も漏れ聞かれたひと時であった。一方、その中で我々を大いに元気づけてくれた会員の一人は今井君である。彼は卒業後しばらくして渡米し、現在まで麻酔医としてニューヨークで現役を続けているのだ。極めて淡々とした語り口ながら現在の仕事について触れ、渡米の際にはお手伝いしたいとお誘いの便についても触れて、元気を与えてくれた。藤原君の締め挨拶のあと、同ホテル内で開いた二次会にもほとんどの会員が参加して、座談の花がにぎわったのは望外のことであった。

翌日は、従来は幹事のほうでエクスカーシオンやゴルフコンペなどを計画・実施するのだが、今回は幹事側の都合によりすべて見送ることにした。楽しみにしていた会員には非常に迷惑をかけてし

まったことに対しては、ひたすらお詫言  
するしかない。本当に申し訳ありません  
でした。

幹事側としては、今回の記念同窓会を  
もって全員参加の規模のものは最終にし  
ようという思いで計画した積りであった  
が、五年後、十年後の同窓会

もやるべきとの意見が相次いで聞かれたのは、老いをも恐れぬ「よんいち」魂のなせる業かと、頼もしいかぎりというべきだろうか。財務大臣の先ごろのあの一言はみんなの胸にどのように響いていたのかなと思ってしまうが、いや、人の欲には限りがないということを再確認した次第である。

竹田名誉教授のご講演に先んじて物故者九名に対する黙祷を行ったが、そのうちの中務紀君は本会の記念誌「よんいち」の創始者であり、これまでの三巻を独力でまとめて刊行した立役者であった。今回は幹事の渡辺君の努力で「よんいち」第四号を卒後五十周年記念誌として編集し、当日全員に手渡すことが出来た。これには竹田名誉教授の御寄稿文が巻頭を飾っており、十六名の会員の文章が詰まっている。同窓会の席上で各自が吐露した近況をさらに濃くした内容であり、記念誌の名にもとること無き絶品と自負するところである。



会員諸氏の心意気はともかくとして、喜寿という年回りを前にして十年後はおろか五年後の本会さえどうなるかが案じられるが、別れに臨んだ会員の口からは「次も会おうぞ」であったことを付記して報告を終える。

参加者：竹田亮祐（来賓、名誉教授）、青柳健男、浅野公子、浅野浩、今井陽介、板谷興治、今泉宗久、池上文詔、梶原光令、同夫人、木下昭、荻野彰久、松田（奥村）芳郎、勝見哲郎、河村憲一、佐野謙、小島明、小西（加藤）奎子、小西二三男、齋藤光正、白石制、新正浩、杉盛恵、高橋梯二、谷川裕、岩本（藤田）弘子、広瀬（時国）優子、橋本琢磨、藤原徹、水野洋一、村田瑞穂、森田信人、同夫人、中井継彦、同夫人、万見新太郎、同夫人、土屋雅之、山之内博、若泉悟、東福要平、同夫人、宮崎公臣、同夫人、渡邊甫  
物故者：小野江為久、金井武雄、神本正憲、小西（中川）馨、島巖、中林肇、中務紀、難波晃、柳下邦男  
（幹事：東福要平、宮崎公臣、渡邊甫）

### 平成五年同窓会

平成五年同窓会は五年毎の開催の予定としていましたが昨年は機会を逸して開催することができませんでした。今回、六年ぶりに金沢湯涌温泉にて八月二十七日（土）に開催しました。

電子媒体での連絡を中心としたため、うまく連絡が取れなかった方もおり、男性二十三名、女性六名、計二十九名の若くない人数となりました。北陸外からは愛知県や大阪府からも参加してくれました。集まった同窓生は学生時代とほとんどかわりなく、「みんな昔のままだね」という会話があちらこちらで聞かれました。

会は、初めに医学部時代に惜しくも亡くなった上條英寿君に黙祷をささげ始めました。各自の近況報告をするとも、精神科の長澤達也先生が発掘した平



成三年の精神科系統講義の答案の返却があり、その点数とランキングをみて大いに盛り上がりました。二次会では、お互いに仕事や生活の今後について語り合い、気づけば深夜遅くとなりました。  
次回からは、同窓会を忘れないようには、オリンピック開催年の八月末の土曜日に、行うということで合意を得ました。  
ということ、二〇二〇年東京オリンピックの年の八月二十九日（土）を予定します。連絡は電子メールを中心に行いますので、十全同窓会に電子メールアドレスを登録していない方は、お手数ですが、山下竜也または北川育秀までご連絡ください。

当番世話人：北川 育秀、山下 竜也  
（山下 竜也、北川 育秀 記）

# JUZEN FORUM HISTORICUM 十全歴史ひるば [9]

## 金沢医学館第一期生 藤本純吉の生涯 (その2)

編集委員 山本 健

### 医師としての藤本純吉の生涯

藤本純吉は明治十八年(一八八五)二月、田中信吾、不破鎖吉、村上直恵らと私立尾山病院を金沢博労町六十三番地に開設する。純吉は明治三十四年(一九〇一)三月から第三代の尾山病院院長を務める。明治三十六年(一九〇三)九月、純吉は味噌蔵町下中丁八番地の一へ転居。この地は養父第七代藤本長左衛門の家宅があった場所である。「藤本純吉傳」(以下「純吉傳」)<sup>(1)</sup>にはこの転居に際して「代価二千六百円」と書かれていることから、一旦手放した養父ゆかりの家宅を、再度入手したものと考えられる。大正元年(一九一三)十二月に尾山病院が勤務医師の高齢化を理由に閉院した後、純吉は味噌蔵町の自宅で医業を開業する。孫の成男氏が養育されたのもこの自宅であろう。純吉は自宅医業を昭和八年(一九三三)に閉院し、同年大札記念金沢市立図書館(現 金沢市立玉川図書館)に医学書を中心とする第一回の史料寄贈を行った<sup>(2)</sup>。純吉は昭和十三年一月二十六日、数え年八十九歳で天寿を全うし、妻の貞、長男喜久雄、養子の成男とともに、金沢市小立野の浄土宗龍宝山如来寺に眠っている。

### 如来寺藤本家墓碑銘の調査

如来寺の藤本家墓碑銘は風打雨触のために一部が判読し難くなっており、将来さらに判読が困難になると危惧される。藤本純吉のご子孫である藤本成明氏のお許しを得て、墓碑銘を調査した。

墓所を調査する際に障壁となりやすい条件として、①菩提寺が特定できない、②火災などによる菩提寺過去帳の喪失、③個人情報保護を理由に、あるいは調査者とご子孫との感情的なトラブルのために調査が拒否される、などが挙げられる<sup>(3)(4)</sup>。今回の調査では、菩提寺と合葬者の氏名については「純吉傳」に明記されている。さらに「ご子孫である成明氏から、如来寺に残る同家過去帳の調査をお許しただいたこと、成明氏がご自宅に祀っておられるご位牌によって、ご先祖のお名前と戒名の対応が確認できた。

如来寺の墓地は平成二年に大幅に区画整理されており、

その際に六基立っていた藤本家の墓石は二基に整理された<sup>(5)</sup>。現在の藤本家の墓所には、新旧の墓石が二基並んでいる(図1)。向かって左側の新しい墓石は、平成二年の区画整理の際に藤本成明氏の父上である成男氏が建立されたものである<sup>(6)</sup>。墓石の右側面には四名の院号・勲位・氏名と没年月日が彫られている。



図1 金沢市小立野如来寺の藤本家墓所。後ろの建物は小立野善隣館。

- 観喜院 昭和十年一月九日
- 仁篤院 昭和十三年一月廿六日
- 謙徳院 昭和十七年五月廿四日
- 正四位勲三等 藤本成男

信篤院善譽明成居士 平成三年八月二十二日  
藤本家のご位牌と如来寺過去帳から確認できたお名前と戒名の対応は以下の通りである。

- 藤本 喜久雄 観喜院忠譽慈久大雄居士 昭和十一年九月没
- 藤本 純吉 仁篤院光譽明徹純正居士 昭和十三年一月二十六日没
- 藤本 貞 謙徳院明譽貞圓大姉 昭和十七年五月二十四日没
- 藤本 成男 信篤院善譽明成居士 平成三年八月二十二日没

養父藤本長左衛門と純吉の最初の妻早はいずれも如来寺に土葬されており<sup>(7)</sup>、戒名も明らかになっているが、現存する墓碑銘には記録がない。

向かって右側の古い墓石の正面と左右側面には、ご夫婦と思われるお二方の戒名、命日が彫られている。

- 轉聲院法警大輪居士 文化四卯 六月三日
  - 池光院連警妙照大姉 寛政十二未 九月二日
- 「純吉傳」にも墓碑銘と同じ戒名と命日が記述されているが、名前は記されていない。そこで没年から「轉聲院」が奉公したであろう藩主を調べ、次に奉公した藩主の記載がある藤本家の先祖を「純吉傳」によって調べた。その結

果「轉聲院」の院号を持つ先祖として、第三代藤本太左衛門(後 長右衛門)が浮かんだ。第三代藤本太左衛門は、前田家第十一代藩主治脩公に能太鼓を指南し、藩主の命によって江戸から国表(金沢)に引越越し、御徒並みの士分に取立てられた人物である。さらに「純吉傳」の巻頭に、「轉聲院」は純吉の実母小泉寿々の祖父、藤本長右衛門清方の戒名である」との記述がある。以上から、この墓碑銘が第三代藤本長右衛門清方夫妻のものであることが確実になるとともに、第三代藤本長右衛門は、藤本純吉の実の曾祖父であることも明らかになった。

われわれの大先輩である藤本純吉の一生を「純吉傳」から読み解く過程で、印象に残った点を記してまとめたい。1. 純吉が生きた明治は激変の時代であった。維新を境として七代受け継いだ御手役者の専門職を失った。絶たれた純吉は、医師となつて一家を支える決心をする。しかし当時の医療によって救命できる患者は僅かであった。藤本家の系図を調べると、多くの親族が早世している。このことは世継ぎが絶えることに繋がる。例えば第二代から第八代の純吉に至るまでに養子として藤本家を継いだ当主は、純吉を含めて五名に上る。純吉個人にとつては、最初の妻に先立たれ、長男喜久雄の急逝に逢い、幼い孫達に亡くなるのを目の当たりにして、医師としての無力感に打ちひしがれたことと思う。

2. 著者が「純吉傳」を調べ始めたきっかけは、医学館第一期生集合写真の撮影年を明らかにするためであった<sup>(8)</sup>。しかし純吉は医学館の講義科目や講義内容は詳細に記録しているが、学友や教員についての挿話は全く残していない。ひとつには縁がなくなり日々の生活に困窮していたこと、もうひとつは同期生の多くが土族の子弟であったのに対し、純吉は御手役者の廃止に伴って土族籍から平民籍に移籍されたことがわだかまりとなつていたのかもしれない。

【参考文献】  
 (1)藤本純吉「藤本純吉傳」金沢市立玉川図書館近世史料館  
 (2)川図書館近世史料館 藤本文庫、史料番号 特096、0-491  
 (3)文獻(1)見返し序文  
 (4)松本明知「改訂版 華岡青洲と麻沸散」麻沸散をめぐる謎① p.161-162、真興交易(株) 医書出版部 2008(平成20年)  
 (5)藤本成明氏私信  
 (6)山本健、板垣英治、赤祖父一知「金沢医学館第一期生の集合写真はどこで撮影されたか」北陸医史 第38号 p.70-77、2016(平成28年)

# 金沢大学附属病院神経科病棟 百有余年の変遷

明治三十一年（一八九八）に第四高等学校医学部を卒業して、東京帝国大学医科大學助手を経て、アメリカ留学（アドルフ・マイヤー教授に師事）から帰朝した松原三郎が、明治四十二年（一九〇九）二月二十二日金沢医学専門学校教授を命ぜられ、精神病学、神経病学、法医学講座を担当し、現在の神経精神医学教室の基礎作りを始めた。

松原三郎教授は着任後、病室、診療室、研究室などの新築（図1）に着手し、明治四十三年（一九一〇）九月に落成している。この新築病室（図2）に対して、東京帝国大学医科大學三教授は、「此新築病室ハツエルレノ如キモノ一個モナク但随時粗暴ナル患者ヲ收容シ得ベキ様ニ变化シ得ベキ室三個アリ日本建築トシテハ模範的ナルベシト稱ス」と称賞している（呉秀三・我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設。復刻版。精神医学神経学古典刊行会、東京、一九七七）。

神経精神医学教室の第二代目の早尾雄教授時代の昭和四年（一九二九）七月には、当時としてはめずらしかった鉄筋コンクリート二階建の病棟が増設された（図3）。その中には持続浴の浴槽も備えられていた。男子病棟として使用された。

教室の第五代目の大塚良作教授時代の昭和四十三年（一九六八）十二月、新築された金沢大学附属病院第五病棟（図4）の二、三、四階に神経科精神科病棟

が移転し、二階は附属施設、三階は女子病棟、四階は男子病棟の附属施設、病棟は、山口成良講師（当時）がアメリカ合衆国ロスアンゼルス（UCLA）に留学中に見学した、同大学の神経科精神科病棟の内容を大方取り入れたもので、附属施設には遊戯療法室（図5）、作業療法室（図6）などがあり、病室にはダイルーム（図7）が設けられた。

教室の第七代目の越野好文教授時代の平成十二年（二〇〇〇）十二月、十階建ての東病棟の後に北病棟（図8）と名づけられた神経科精神科の新病棟が落成し、第五病棟にあった神経科精神科病棟が北病棟に移転して現在にいたっている。図9は北病棟のナースセンター、図10は北病棟の病室である。

（編集委員 山口 成良 記）

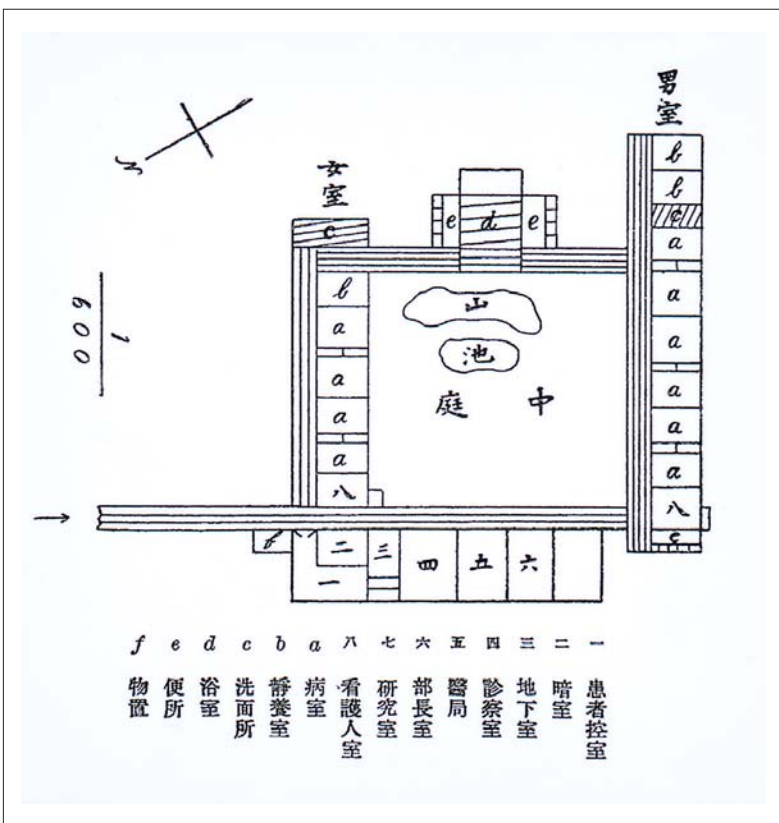


図1 初代松原三郎教授の設計（1909年）になる病室、外来、研究室



図3 1929年7月竣工なった男子病棟



図2 1910年落成した最初の病室、外来の一部（1965年頃撮影）



図5 第5病棟2階遊戯療法室



図4 1968年12月新築された第5病棟



図7 第5病棟3階(女子病棟)テイルーム



図6 第5病棟2階作業療法室



図9 北病棟ナースセンター



図8 2000年12月竣工なった北病棟



図10 北病棟病室

## 同窓生の消息

## 第十七回日本クリニカルパス学会学術集会開催報告

石川県立中央病院 久保 実

第十七回日本クリニカルパス学会学術集会を平成二十八年十一月二十五日(金)・二十六日(土)に金沢市の石川県立音楽堂とホテル日航金沢で開催いたしました。学術集会のテーマは、「患者さんに優しいクリニカルパス」エビデンスとナラティブの融合」としました。クリニカルパスは治療計画を画面化し患者さんと共有すると共に、エビデンス(EBM)を重視することで無駄を省き、治療・ケアの標準化、業務改善・効率化を求め、在院期間の短縮や医療資源の節約、経営効率の改善、医療の安全性の向上を図ってきました。しかし、その一方で、お年寄り、障がいや合併疾患のある患者さんにおいては必ずしも満足していただけない医療となったり、バリアンス(治療計画からの逸脱)が発生しやすくなっています。患者さんの状態と物語(ナラティブ)に配慮することで患者さんにやさしいパスとなると考えます。患者さんに優しいパスのシンポジウムとして①インフォームドコンセント、②早期回復・早期離床、③超高齢化社会、④診療所の視点からの地域連携を企画いたしました。その他にも電子カルテ、地域連携、パス記録、多職種協働などを取り上げて討論いたしました。

特別講演1では、前金沢市長の山出保様に市長として伝統文化と革新を融合させた文化都市金沢の町づくりにかけた熱い思いをお話しいただきました。特別講

演2では、東京女子医科大学名誉教授の仁志田博司先生に「周産期の母と子の医療から学ぶ共に生きる心」を講演していただきました。特別企画として「さまざまな視点から見た医療の「質」」を企画しました。

金沢らしいおもてなしとして、パイプオルガンコンサート、懇親会での金沢の伝統芸能・素囃子、石川県の海の幸山の幸、おいしい日本酒などを楽しんでいただきました。

計五〇〇題を超える演題が集まり、医師、看護師、コメディカルなど約二千五百名が参加しました。石川県でもパスがさらに発展し、質の高い医療が提供されることを祈念します。



## 医学部ラグビー部四十周年記念会開催

はじめに

昭和五十二年に遊び人達を集めて創部した医学部ラグビー部ですが、平成二十八年には四十周年を迎えることができました。前回平成十八年の三十周年記念会は、筋金入りのランナー山本悦秀ラグビー部前部長の定年までには余裕を残して、絹谷清剛先生が四代目部長を引き継ぐ大慶の祝賀会でした。十月九日に開催した今回は、何の変哲も無い半端な節目にも関わらず、前回と遜色ない五十名以上のラグビー部OBが集まる大盛会でした。

根上町の県営ラグビー場には例年以上

に多数の無鉄砲医師が集まり、熱血試合を楽しみました。ゲーム前半は現役VS若手OB戦で、OBは接点の圧力が強くタックルも良く、両者とも簡単に失点しない互角の好ゲームでした。原拓央先生は柔軟な科学的合理性で、トライを取れない時はドロップゴールも蹴り、現役学生に手本を示しました。即ち堅いスコットランドを見習って、プレッシャー強くトライ困難な西医体では、PGやDGで加点して優位にする戦術を、現役学生には学んで貰いましょう。後半は年配OBが出て点差は開きましたが、ベテランの味で終盤にモールの押しに固執して1トライを取りました。ラストプレーで現役ゴール前十メートルのスクラムでは、「百万石」(スクラムトライ)のサインが

出ました。トリモチの粘りで真っ直ぐ押し込み、トライまでもう二メートルの場面が零れ出るアクシデント有り、幻のスクラムトライで幕切れでした。愚直に押し付けたビター青春ですが、この最強FW第一列は、一番瀬戸幹人、二番高田宗尚、横山幸太、三番内記義雄です。シブトイ百万石人生は、いい歳超えても健在です。

晩の部は四十周年記念宴会

四十周年記念会場はホテル日航金沢を、絹谷清剛部長が早くから確保されており、さらには遠方の参加者向けに、同ホテルの客室を格安料金で提供して貰いました。助かりましたホンマに感謝です。まずは絹谷部長が開宴の挨拶をされ、ラグビー部が四十年間存続できた事を、皆で祝賀できる目出度さを語りました。次いで瀬戸OBは暴走せんように捲いても毎度の長話し、そして元氣良く乾杯に漕ぎ着けました。実はこの四十年間に、ラグビーの仲間が何人か亡くなっており、久々に再会した仲間が大いに飲みクレイジーに楽しむのが、ラグビーと酒を愛した故人への一番の供養であります。その前に全員が神妙に、失った戦友に黙祷を捧げました。記念会には金沢大学全学ラグビー部部長の松本樹典工学部教授、医学部ラグビー部初代コーチで毎年OB戦の笛を吹く鈴木重通レフリー、金沢大学全学と医学部の両ラグビー部を指導する山本寛コーチがゲスト参加さ

れ、三人から有り難い祝辞を頂戴しました。三者共に筋金入りのラグビー人間で、松本先生と瀬戸OBは昭和五十五年代前半に金沢クラブで一緒にプレーしたチームメイトで、彼は宮田龍和OBとは「焼き横」の飲み友達でした。鈴木レフリーは昔の城内トレンセン仲間ですが、教養部時代はポーター部やつた宮田OBとも親友です。宮田OBは北海道へ当直の出張で記念会は欠席、再会を期待した二人には空振りでした。山本コーチは天理高↓法政大↓日新製鋼とエリートコースで活躍、高校日本代表ヘッドコーチを務めた名伯楽です。

偶然にも隣の宴会場では、昭和五十九年卒業十全同窓生のクラス会を開催しており、その同期のラグビー部OB安藤・垣塚・北林・葛島・立石・廣瀬・廣田先生の全員が、両方掛け持ちで乱入してくれました。大盛会の記念会終盤では、参加OB中最上級生の上木修先生の締めで、元氣一杯に万歳三唱しました。これだけでは終了とならず、吉田豊OBのイントロから肩組を組み「四高寮歌」を大合唱しました。最後は昭和五十八年西医体三位の主将辻恭嗣OBがコブシの利いた演歌調リードボーカルで、「ラグビー哀歌」を熱唱して閉会しました。

各種部活OBの十全同窓生



多しと言えど、ラグビー部は毎年OB戦OB会を何十年も続ける伝統を脈々と継承しており、「歳月は慈悲を産む」幸福を堪能する「星影冴ゆる記念祭」でした。

(瀬戸 幹人 記)

## 学生課外活動支援報告

### 西日本医科学生総合体育大会

第六十八回西日本医科学生総合体育大会は、主管関西ブロック、代表主管校徳島大学の運営のもと、平成二十七年八月六日から八月二十一日の十六日間にわたって開催されました。開催地が徳島ということもあり、過去大会以上に参加選手の中症が危惧されていましたが、今大会より掲示や会場での見回りを行ったこともあり、予想より遥かに少なく、また大きな事故・怪我もなく、無事に大会を終えることが出来ました。

今大会において金沢大学は、出場四十四校中総合優勝とたいへん優秀な成績を収めることが出来ました。

参加した学生の感想としては、「これまでの練習の成果が十分に出せた。本当に頑張ったよかった。」というものや、「思ったような結果は出せなかったが、次年度に向けての改善点がたくさん見つけた。」というものなど様々でした。

いずれにしても、今大会に向けて仲間と共に直向きに練習に取り組んだこと、大会を通して感じ、学んだことは私たちが学生にとってかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あつてのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度の主  
管校は山口大  
学となりま  
す。どの部活



も、今大会で見つけた課題に取り組み、選手個々人が持てる実力を全て発揮できるように精一杯頑張つていきたいと思ひますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

(主な大会成績)

優勝

女子弓道部 市川 輝人  
男子陸上ハンマー投げ

準優勝

男子スキー部 池田 俊也  
男子卓球シングルス部門

女子水泳二〇〇m個人メドレー 村田美希乃  
三位入賞

剣道部 有賀一平戸一北澤一石野  
男子陸上四〇〇m

男子陸上二〇〇m 石野 雄士  
女子陸上一五〇〇m 山田 はな

三〇〇〇m 山田 はな

四位入賞

男子柔道部 齋尾朱佑弓  
女子水泳五〇〇m自由形 村田美希乃

一〇〇mバタフライ 評議委員 河井 陽昭 (記)

### 白山診療班活動報告

白山は、石川、福井、岐阜、富山の四県にまたがる、標高二七〇二メートルにもおよぶ山で、石川県のシンボルとして知られています。富士山、立山とともに日本三霊山の一つとして数えられ、古くから信仰の対象とされており、御前峰山頂には白山比咩大神を祭る白山奥宮があります。白山一帯は国立公園に指定され、クロユリをはじめとした様々な高山植物や石川県の県鳥であるイヌワシなどの野生生物が多く観察されます。年間数万人の登山客

が訪れる白山で、最も多くの賑わいを見せる夏山シーズンに登山客や室堂スタッフの健康を六十年近く守り続けてきたのが、この金沢大学白山診療班です。

毎年、正班員の医師と副班員の学生が数日間おきに交代で白山に登り、室堂にある診療所を切り盛りしています。白山診療班副班員として活動する私たち学生は、その数日間でも普段の学生生活では得られない様々な経験をすることが出来ます。そのひとつは、医師の診察や治療を間近で見られることです。実際の患者さんに向き合うか、症状を知り病態を理解するために何を聞けば良いのかなど、臨床に直結する知識を学ぶことが出来るのはとても貴重な体験です。また、学年

が上がることにも出来ることも増え、医師が不在の場合でも学生に可能な範囲で患者さんの対応が上手くできると、自らの成長を感じられます。街中の喧騒を離れ、静かな自然の中で過ごせるのも白山診療班の醍醐味です。登山客の多くは室堂に一泊し、明朝にご来光を拝むため山頂まで登ります。私たちもパトロールとして山頂まで登るのですが、天候の良い日に運よく拝むことができたご来光の美しさは忘れ



られないと班員は口々に言います。室堂のスタッフや白山比咩神社の方々とも懇意にさせていただき、その交流の中でいろいろな考え方を学ぶことで視野を広げる良い機会ともなっています。

平成二十八年度は七月二十二日から八月二十八日まで三十八日間にあたり、百十五名の患者さんの診察を行いました。本年度も多くの先生方に診療活動にご協力いただき、ありがとうございました。例年に比べ新入生を多く勧誘できたため、医師、学生ともに不在の日を減らすことが出来ました。今後ともできる限り全日程で学生が駐在できるよう努めていきたいと思っております。

末尾ながら十全同窓会の皆さまには白山診療班の活動にご支援いただき、誠にありがとうございました。今後ともこの伝統ある活動を継続できるようご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。(医学類四年 加戸 太陸 記)

## 立山診療班活動報告

立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高三千メートルの天上界で、年間約百万人もの観光客が訪れます。石川県の人口に匹敵するこの数字は、世界一登山者の多い東京・高尾山の登山者の約半分、世界遺産である富士山の四倍程度です。私たち立山診療班は、夏休みの期間を利用し、立山で発生する疾病・事故に対応すべく富山県警山岳警備隊、山小屋、環境省と連携し、無償で診療活動を行っています。合計三つの山岳診療所には、夏休みの一ヶ月間に、例年百名ほどの患者さんが受診されます。

今年度は

学生六十七名が診療所に入り、診療活動にあたりまし

た。この学生の数は医学類の部活としては最大級です。

このように人気がある理由のひとつには、臨床の現場を

実際に見てみたい、という学生の向学心があると思えます。医師の問診・処置を間近にみることや、医師不在時に学生が対応し、電話で医師に助言を仰ぐといったことは、学生にとって実際の医療との貴重な接点です。また、山小屋での生活も魅力です。太陽のまぶしく照りつける屋根の上に布団を干したり、溢れるばかりの星空を眺めながら、小屋の人々・医師・先輩後輩と送る共同生活は、印象深い思い出となります。

この会報をご覧の診療班卒業生の先生方も、学生の頃を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いに思えます。例年二十名程度の先生方が診療所に当たられておりますが、三つの診療所を抱える立山の診療には、もっと多くの先生方が必要だと考えております。また

我々学生たちにとっても、先生方と山小屋で一緒に過ごす時間は大変貴重です。もしご興味がありましたら、立山診療



班 kum.tateyama3015@gmail.com までご連絡ください。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援して下さった皆様、十全同窓会の皆様のお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。(医学類四年 谷村 純 記)

## ACLS金沢活動報告

ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢は、BLS (一次救命処置) とACLS (二次救命処置) を中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っております。BLSである心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・除細動などといった高度な治療を用いたACLSまで幅広く活動しています。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使つての手技練習をするので、より臨床に近い体験ができます。全国の医学部にACLSサークルが存在し、それぞれの大学が開くワークショップ (WS) に参加しています。

WSを通じて私たちは多くのことを学んでいます。それは医学的な内容に留まりません。大勢での議論を時間内にまとめる、参加者の達成感を高めるためのアイスブレイキングを工夫したり、より効果的に記憶を定着させるためのレクチャーを考へたりしています。パワーポイントに使うフォントから配色、フィードバックに適したホワイトボードの使いかたに至るまで、



WSでは非常に緻密に計算されています。こうした普段の授業では学べないスキルの全国仲間と切磋琢磨できることこそ、このサークルの最大の魅力の一つだと感じています。

今年度も新たに一年生が加わり、去年にも増して活発に活動しています。三月には北海道大学で開催されたALSWS、信州大学で開催された外傷WS、福井大学で開催されたALSWS、六月には京都大学で開催されたBLSWS、十月には京都大学で開催されたALSWSと各地で開催されたWSに参加しました。

また、全国規模のコミュニティだけではなく、金沢大学、富山大学、福井大学の北陸三大大学のACLSサークルが定期的に集まり、様々な内容について議論、発表、実践をして、互いに刺激あっています。六月には、富山大学で開催されたBLSWSに参加しました。

その他にも、定期的に学内で勉強会を開き、胸骨圧迫や人工呼吸、気管挿管といった手技の練習をしたり、BLSやALSの根拠を勉強したりしています。また、来る二月には本学が主催してWSの開催を予定しており、より一層活動に熱心に取り組んでいます。



最後になりましたが、ご指導、ご協力くださるOB・OGの先生方や私たちの活動を支えてくださったっている救急部、麻酔科蘇生科そして十全同窓会の先生方に厚く御礼申し上げます。  
(医学類三年 伊藤 賢奎)

### 医学展開催御礼

医学展も終わり冬の足音が聞こえる今日この頃ですが、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。去る十一月五日、六日に開催されました二〇一六年度医学展は秋晴れにも恵まれ、総合受付のカウントによると約三五〇〇人の来場者を迎えた盛況のうち無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様には医学展開催に向けてご支援・ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

両日とも校舎内の企画の全ブースの行列が絶えず、校舎外のステージ観覧者も多く会場が人で埋め尽くされる勢いででした。来場者アンケートでは内容に満足したとの声を多数頂き、医学展への関心の高さ、満足度の高さを実感しこの上ない喜びを感じました。

今年の金沢大学医学展のテーマは「CHANGE」を掲げて参りました。医学展を一から見直し、より安全で、楽しく・分かりやすい学園祭をつくりたいという意識



のもと準備してまいりました。特に体の不自由な方への配慮や非常時への対応を徹底し、皆に優しい開かれた学園祭を目指しました。さらに医学展が学生や地域の方など誰かの生活が豊かになるきっかけになれたらという思いも込められておりました。実際に学生スタッフ、来場者共に多くの笑顔が見られ、医学展を楽しむ姿がうかがえました。

一方、医学展自体を「CHANGE」することは困難を極めました。医学展の開催時期、ステージ模擬店の設営場所など変更したい点が多々ありました。しかし既存の医学展を変化させるのは大学関係者・病院関係者・地域の方々・学生等多くの方への影響が懸念され実現されませんでした。医学展を作る事の難しさを感じましたが、来場者からは学生の対応や企画・ステージ・模擬店の内容に満足されたとの声、来年も医学展を楽しみにしているとの声が多数聞かれました。困難が多く心が折れそうになる事もありましたが、仲間と力を合わせて真剣に必死な思いで医学展を開催し、多くの来場者に楽しんでいただけて心から良かったと思えました。

医学展はただ受け継ぎ、受け継がれるものではなく、その時代や学生に合わせて変化するべきものであると考えています。先代の良き伝統は守ると共に変化を恐れず新しい事を積極的に取り入れてほしいです。今後さらなる医学展の発展を願いつつ私たちも医学展を支援させていただきたく所存です。十全同窓会の皆様には、医学展の更なる発展のためご理解いただき、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。  
(二〇一六年度医学展実行委員長

森山 証純 記)



十全昔話

つながりで、歴史を創ろう

村本 信吾 (昭和四十二年卒業)

◎ダーウィンが来た 毎週日曜日の夜、夕食をとりながらNHKテレビを観て、仕事で疲れた頭を癒やしています。野生動物の子育ての様、子孫を残すことに全力投球している姿です。人類は進化した動物のモデルですが、わが国では退化に向かい、人口が減少してきています。子育てをしない人達が増え、子孫を残す気持が薄らいできています。それは、苦労を避ける姿、子や後輩を育てることから逃避している姿です。楽を求めてばかりでは、人生、歴史は創れません。若い世代の人達に、是非観てもらいたいです。

◎学生時代 教養部二年間は、部活動に精を出し、学問が疎かになったほどでした。進学課程では、洋楽部のコーラスで二年間活動しました。看護学生との混声合唱もあり、女性との会話も多く経験できました。新潟大学医学部にも同様の倶楽部があり、毎年交互に向いて音楽会を楽しみました。七十五歳の現在も、コーラス(バス)で歌っています。

クラスの役員に指名されたため、雑用も多くしました。一つは、生協・食堂経営を学生が運営していた時代のこと。当時、食堂のあった建物の一角に、小さな売店があり、共済部の名の下、一人の女性販売員を雇って経営していました。授業の休憩時間や昼食時間になると積極的に売店に行き、そこで店員の仕事をしました。二つ目はスケジュール表作り。

ベッドサイド・ティーチングやポリクリの、八十人近くいた同級生一人一人の時間割表を、毎月作成していました。

◎インターン制度 卒業した昭和四十二年は、それまで行われていたインターン(卒後研修)制度が廃止された年でした。私達は、政府に抗議する形で、自主的にそれまでと同様のインターンを一年間実施しました。この時の研修では、産科などの必須科目が幾つかあつて貴重な経験をし、内科医師としての人生を歩んで

いる現在、極めて有効であつたと感じています。現在の卒後初期臨床研修制度は二年間で、発足当初あつた必須科目が減り、一年以上は選択・希望の科でよろしいとなつていきます。二年間は、無駄です。総合診療が習得できる、充実した一年間の卒後臨床研修を提案します。

◎十全同窓会との出会い 昭和五十年四月、人生の転換期が訪れました。医師になつて八年目、当地、公立能登総合病院に就職しました。一年後、転勤の可能性があつたのですが、崩壊寸前であつた病院の再建のために、居残りを命じられ、今日に至ることとなりました。

仲間達とのつながりを大切にして育ち、クラス会や、第一内科、同第一研究室(糖尿病、代謝)の同窓会には欠かさず出席して来ました。七尾市に来てからは、七尾市医師会の会合には可能な限り出席しました。十全同窓会とのつながりが密になつたのは、昭和六十三年のことです。病院長になる前年、医師会の圓山義一先生(昭和十八年卒業)から、殖生知則先生(昭和三十七年卒業)を通じて、「七尾市で地方での活動を開始したいが、誰か同窓会本部から先生を呼んでもらえ

ないか」と連絡が入りました。

後日談ですが、殖生先生からは、「十全同窓会の本部から、『七尾地区における同窓会会員の活動報告を会報に載せたので、何か資料を送ってほしい!』と言つて来たのだが、一杯呑むだけでも良いから、何か格好をつけて、写真だけでも撮つて本部に送れるように、君、手配してくれないかね!」と、圓山先生に頼まれたとのことでした。

◎十全同窓会七尾鹿島支部 そんな流れの中で、殖生先生は、「そこで急遽、圓山先生のご指導を仰ぎながら、泥縄式に『十全同窓会七尾鹿島支部の規約』を作成し、初めての会合(宴会)を開いて、写真を撮り、どうにか本部の要望に間に合わせたと、最近の流れの中で、昭和六十三年に開催された第一回目の支部総会後の特別講演には、私がお願ひして、本陣良平金沢大学学長(昭和二十年卒業)に来て戴きました。本陣先生に白羽の矢を立てた背景には、幸運な出会いがありました。一つは、学長であられたことです。二つ目は、本陣先生は解剖学の教授でしたが、圓山先生が解剖学の助教授までされていたご縁、三つ目は、本陣先生の出身高校が私と同じ石川県立小松高校であつたことです。大学生時代、小松高校出身の人達が集まる同窓会(小松会)があり、数年間私が世話役をしていて、本陣教授とは屢々お話をしていました。

◎十全同窓会能登支部 六年前、七尾鹿島支部長の任にあられた佐原吉博先生(昭和三十六年卒業)が提案されて、二十三年間存続した七尾鹿島支部を発展的に解散して、能登全体を含む支部を発

足させ、現在三代目の支部長を私が務めています。

◎十全同窓会の未来 新しい展開があることを夢見ています。最近、金沢大学医学系を卒業しても、十全同窓会に入会しない人達が四分の一もいるとのこと、驚いています。同級生はもとより、先輩や後輩と縁を切る人達が多く存在する時代となつていきます。縦横のいずれの人達とも楽しむことをしない、出来ない人達が増えてきているのです。

医師の職業を選び、社会の中で生きて行くことを決めたからには、多様な人との交わりが重要と思つていきます。同窓会の良さに接し、先輩後輩に教え教えられて、歴史を繋いで行くこうではありませんか。



私が勝てる場所

医学類四年 左郷 美森

十全同窓会員の皆様こんにちは。医学類四年の左郷美森と申します。今回学生コーナー執筆の依頼を受け、何について書けばよいか大変悩みました。宇宙や自然について書いてみれば面白いのではなにかと思いましたが、知識が足りず断念しました。恥ずかしい気持ちもあり、また自己満足のような文章になってしまふとは思いますが、私自身の事について書かせて頂きます。拙い文章をお許し下さい。

突然ですが、大学受験大手予備校、東進ハイスクール現代文講師の林修先生をご存じでしょうか。現在冠番組やレギュラー番組をいくつも持ち、大学受験生のみならず子供からお年寄りの間まで広く知られている人気講師です。東進ハイスクールのコマージュナルに使用された「いつやるか？今でしょ！」は、二〇一三年の流行語大賞に選出されました。林先生は東京大学法学部を卒業後、日本長期信用銀行に入社しますが、「この会社はもうだめだ」と感じ半年で退職、その後紆余曲折を経て予備校講師に転身します。私は林先生がとても好きで、テレビをつけて偶然先生が映っていると、そのまま見入ってしまうことが多々あります。先生が書いた本も持っている程です。

なぜこの先生が好きなのか、私の高校生活の話をします。高校生の頃の記憶は、部活動をしてたことしか残っていません。ハンドボール部に所属していました。休みは週に一度あるかどうか。平日は暗

くなるまで練習し、帰宅して夕食をとった後は疲れのあまりそのままリビングで寝てしまい、次の日の朝シャワーを浴びて学校に行くという生活を繰り返していました。休日は練習試合で一日が終わっていました。夏は炎天下で、冬は雪の降る中で練習したこともあります。顧問の女の先生は若く美人で大変厳しく、いつも叱られないようにびくびくしながら練習していました。私はレギュラーではありませんでした。クラスメイトの多くが早い時期から運動部をやめて勉強を始めていくのを横目に、なんとか試合に出たい一心で毎日練習していました。しかしレギュラーのチームメイトを追い抜くことはできず、高校三年の四月頃、補欠チームでの練習試合中に前十字靭帯を切り、私の部活動生活はそこで終わりを迎えました。結局最後まで試合に出ることはできず、なんとも後味の悪い終わり方でした。あれだけの時間と労力を注ぎ込んだにもかかわらずレギュラーになることが出来なかつたという事実は私の中にどうしようもない汚点として残り、高校卒業後もその恥ずかしさ許せないという気持ちをしばらく引きずっていました。

林先生の話に戻ります。私は浪人中、まだ「今でしょ！」が有名ではなかつた頃、林先生の講座を一つ受講しました。センター国語対策の講座でしたが、当時こんなにわかりやすい国語の先生がいたのか！と驚いたことを覚えています。講義の内容は私の国語の点数アップに繋がりましたが、それ以上に間に入る「お話」がどれももしろく、印象に残っています。前述の先生の経歴も講義中のお話のひとつです。大学在学時は体重が百キロ

を超えることが、好みの女性にデブと陰口を叩かれ必死に七十キロまで体重を落とし、元デブと呼ばれるようになったという話も好きです。

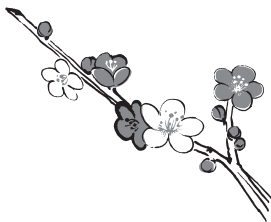
様々なお話の中で今でも心に残っているものがあります。実は先生は数学が一番好きで、東進ハイスクールに入った当初は数学の講師として採用されたそうです。しかし文系出身ということもあり、数学で勝負していくことが本当にベストだろうか？と考え、他の科目の授業を見直し、「相手が軽い！これなら楽に勝てる」と思った現代文を選んだのだそうです。そして現代文講師として採用後はありとあらゆる努力を尽くし、現在の地位を確立されました。「大した努力をしなくても勝てる場所で誰よりも努力をしなさい」、講義でこの言葉を聞いた時、当時の私はかなり衝撃を受けました。そして同時に部活動で全く活躍できなかった悔しさ、恥ずかしさが、ずっと無くなっていたような気がしました。一度自分が選んだ競技なのだから、最後までやり通さなければならぬし、途中で諦めてやめてしまうことは恥ずかしい。日本人によく見られる思考ですが、部活動をしていた頃の私はいつも心の底にそんな気持ちを抱えていました。この考え方が悪いという訳ではありませんが、このような固定観念をひたすら持ち続けていると、私がお道半ばで部活動生活を終えてしまったように、自分の能力を伸ばすことも、成功して良い思いをすることもなく人生が終わってしまう可能性があります。私たちがその能力は平等ではなく、各自が楽に成果を出せることと出せないことの差がはつきりしています。そしてそれが好きなこ

と、やりたいことに一致するかどうかはまた別の話であり、だからこそ面倒で苦しくなります。私はハンドボールが大好きで上達したいと心から願っていました。が、そこは私にとって「勝てる場所」ではなかつたということです。この事実を私がまだ若いうちに気付かせてくれた先生には本当に感謝しています。

学生生活も早いもので残りわずか二年となりました。振り返るとこれまでの四年間は目先の課題をこなしていくこと、どうにかついていくことに精一杯で、自分の将来や取り組んでみたいことについてゆつくりと考える時間を持つことが出来ていませんでした。残りの時間は、自分が得意なこと、極めることができそうな分野探しと、そこで誰よりも努力できる体力づくりに充てたいと思います。もう高校生のあの頃のような悔しい気持ちは味わいたくありません。高校での部活動の経験は、成功したければ適切な場所を選ぶことが大切だということを学ぶ良い機会だったと、今ではそう思うことができます。大学を卒業するまでに是非、「自分が勝てる場所」を見つけたと思います。更にそれが自分の好きなこととなれば、これ以上の幸せは無いでしょう。

と、やりたいことに一致するかどうかはまた別の話であり、だからこそ面倒で苦しくなります。私はハンドボールが大好きで上達したいと心から願っていました。が、そこは私にとって「勝てる場所」ではなかつたということです。この事実を私がまだ若いうちに気付かせてくれた先生には本当に感謝しています。

学生生活も早いもので残りわずか二年となりました。振り返るとこれまでの四年間は目先の課題をこなしていくこと、どうにかついていくことに精一杯で、自分の将来や取り組んでみたいことについてゆつくりと考える時間を持つことが出来ていませんでした。残りの時間は、自分が得意なこと、極めることができそうな分野探しと、そこで誰よりも努力できる体力づくりに充てたいと思います。もう高校生のあの頃のような悔しい気持ちは味わいたくありません。高校での部活動の経験は、成功したければ適切な場所を選ぶことが大切だということを学ぶ良い機会だったと、今ではそう思うことができます。大学を卒業するまでに是非、「自分が勝てる場所」を見つけたと思います。更にそれが自分の好きなこととなれば、これ以上の幸せは無いでしょう。



## 第十回 金沢大学ホームカミングデー開催

平成二十八年十月二十九日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第十回金沢大学ホームカミングデーを開催しました。歓迎式典には百七十六名、懇親交流会には百五十名の卒業生及びそのご家族等にご出席いただき、大変盛況で賑やかな一日になりました。

歓迎式典では、最初に、金沢大学合唱団、フィルハーモニー管弦楽団及び出席者全員で校歌を斉唱しました。続いて、山崎光悦学長の歓迎挨拶、山出 保金沢大学学友会会長の祝辞の後、山本 博理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後は、もりのみやこ少年少女合唱団の合唱により、角間の里イメー

ジソング「森に入ろう。」が披露されました。



歓迎式典で歓迎の挨拶を述べる山崎光悦学長

した。

特別講演では、「大学改革 ささやかな回顧」と題し、国立大学法人小樽商科大学長 和田健夫氏(昭和五十年法文学部卒業)に、自身の学生時代、教員時代、学長の立場から大学や大学を巡る環境について、ユーモアを交えてご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第六回役員総会が開催され、役員の一部交代の報告がありました。

夕刻から開始した懇親交流会は、山出保学友会会長の発声で乾杯し、楽しいひとときを過ごしました。会場では、本学琴尺八部により、開始前と乾杯後に演奏(曲名:六段の調)をしていただき懇親交流会を盛り上げていただきました。その後、講演者の和田学長にも参加いた

き、そろいの法被に身を包んだ卒業生有志による「金沢大学校歌」「北の都」「南下軍」の高唱もあり、会は大いに盛り上がりました。

次回、第十一回金沢大学ホームカミングデーは、平成二十九年十月二十八日(土)に開催が決まりましたので、青春の一ページである懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 越野 衛一 記)



### 金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員の紹介

学内編集委員は、山本博、山岸正和、太田哲生、蒲田敏文、中村裕之、横山茂(副編集委員長)、絹谷清剛(編集委員長)、篁俊成、和田隆志、佐々木素子、濱口儒人、中西清香の十二名。

学外編集委員は山口成良、柿下正雄、津川龍三、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、中村信一、勝田省吾、山本健、大村健二、横山仁、大島徹、横山修、常山幸一、中本安成、若山友彦の十八名。

以上三十名で構成されています。

大井章史十全同窓会理事長には、編集委員会にご参加いただいております。本年もどうぞよろしくお願いたします。

### 編集後記

新春を寿ぎ、十全同窓会会員の皆さまの本年におけるご健勝、弥栄をお祈り申し上げます。

近年の科学・テクノロジーの発展は、生態系や社会システムに大きな影響を与えてきています。昨二〇一六年、AI(人工知能)「ワトソン」が個々の患者あるいは病巣毎に至適医薬品を選び出す、というニュースが世界を駆け巡りました。西年がもう二回りした後の二〇四五年頃には、ヒト脳とAIとが直につながった「ハイブリッド脳」が出現し、人類は新しい進化のステージに進む、とカーツワイルは予言しています(「シンギュラリティ」)。その頃、診療や予防はどのように行われているでしょうか。

「ホモ・サピエンスは、自然選択の法則を打ち破り始めており、知的設計の法則をその後釜に据えようとしている」とハラリも書いています(「サピエンス全史」)。しかし、一方で、幸福度はオキシトシン、セロトニン、ドーパミンなど生化学が決めており、たとえば、シャンゼリゼ通りの豪華なマンションに住む現代の銀行家の幸福感は、泥でできた小屋でブタを飼っていた中世フランスの農民の幸福感を、微塵も上回っていないだろう、としています。

人間を幸福にするのが医学・医療なら、脳内物質やニューロンに関する研究をはじめ、本学の多くの学術研究の価値は益々高まるのではないのでしょうか。鶏旦や声高らかに富士を呼ぶ(有馬朗人)。「世界の金沢医学」(岡本肇)のさらなる発展を期待したいと思います。

(編集委員 山本 博 記)